

市内遺跡発掘調査報告書(16)

みや 宮 遺 跡 の 調 査

こ 小 桜 館 の 調 査

みなみ 南 台 遺 跡 の 調 査

他

2008年

長井市教育委員会

市内遺跡発掘調査報告書(16)

宮 遺 跡 の 調 査

小 桜 館 の 調 査

南 台 遺 跡 の 調 査

他

平成20年3月

長井市教育委員会

序

平成19年度の発掘調査件数は5件で例年と比較すると少ない数ではありますが、3件の公共事業が含まれ調査期間も長期にわたるものが多い年でした。また、発掘成果も各時代にわたり古くは繩文時代の集落跡が発見された宮遺跡をはじめ、戦国時代の館跡に伴う堀跡が検出された遠藤屋敷、明治時代の石垣が見つかった小桜館とさまざまな内容の文化遺産が発見されました。

貴重な文化財の発見とともに、その保存方法についても論議をよんだ年でもありました。特に小桜館の公園整備事業の工事で見つかった明治時代の石垣の保存については、事業主体者の長井市はもとより、関係する地域のみなさまや専門分野の方々からご検討をいただき、埋め戻しによる保存方法が採用されました。明治期の石垣を現状で保存し多くの方に見ていただきたいという意見や、移築し観光資源として第二の道を歩んでもらいたいとの要望もありましたが、現段階では風化の激しい石垣を保存するには盛土で保存するのが最良の策との結論をいただきました。ただ、旧郡役所と石垣の関わりをご理解いただくため、現在の工法と材質で発見された同じ位置に石垣を再現することができました。そして、明治期の石垣の活用方法については将来の保存科学の進歩に委ねることとなりました。

文化財の保護、特に埋蔵文化財の保存問題というのは開発工事の進行過程で発生する場合が多くあります。小桜館の石垣の発見はその最たるものですが、事業主体者、地域住民、専門家が集まり検討会が開催され短い時間のなかで保存対策がとられたのは、将来の文化財保護政策のお手本のひとつになるものと確信しております。

最後になりましたが、本調査にご協力いただきました方々、また、厳しい天候にもかかわらず発掘調査に参加くださいました皆様には、心より感謝申し上げます。

平成20年3月

長井市教育委員会

教育長 大滝昌利

例　　言

1. 本報告書は、長井市教育委員会が国庫補助を受けて実施した、平成19年度の開発事業における調整ならびに遺跡台帳整備に関する市内遺跡発掘調査の報告書である。
2. 事業期間は平成19年4月1日から平成20年3月31日までである。
3. 調査体制は次のとおりである。

調査員 岩崎義信（長井市教育委員会 文化生涯学習課 補佐）
調査参加者 浅野義一、大木正夫、小笠原喜代志、勝美忠一、川村慶次、菊池君栄、紺野輝子、
斎藤勝雄、佐野昭夫、高橋勝太郎、中村三男、長谷部 延、原 幸造、
山口未央（東北学院大博物館実習生）
事務局 事務局長 那須宗一（長井市教育委員会 文化生涯学習課 課長）
事務局主幹 村上和雄（長井市教育委員会 文化生涯学習課 文化主幹）
事務局補佐 岩崎義信（長井市教育委員会 文化生涯学習課 補佐）
事務局係長 神尾昭利（長井市教育委員会 文化生涯学習課 文化係長）
事務局員 青木一美（長井市教育委員会 文化生涯学習課 主事）
資料整理 手塚啓子（長井市教育委員会 文化生涯学習課 H19.10.16～12.31まで）
木村由佳（長井市教育委員会 文化生涯学習課 H20.01.21～03.21まで）

4. 本調査を実施するにあたり、次の方々にご協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。
(順不同、敬称略)
山形県教育庁教育やまがた振興課文化財保護室、梅津組㈱、那須建設㈱、山市㈱、大屋敷地区、十日町地区、大町地区、高野町地区、長井市文化財調査会、遠藤新一、遠藤 忠、小関和季、小関 浩、小林哲男、鈴木寿昭、新野ゆり子、横山辰弘、渡部久雄、長井市建設課
5. 本報告書に記載した挿図・付図はそれぞれスケールで示し、遺構・遺物の縮尺は次のとおりである。
【遺構】住居跡1/60、竪穴1/60、土坑1/50、溝跡1/60、性格不明遺構1/60
【遺物】縄文土器・須恵器・陶器・磁器1/3、石製品1/2
6. 本書の編集および執筆は岩崎義信が担当し、拓本、挿図、図版の作成は手塚啓子、木村由佳の協力を得た。

目 次

I 調査に至るまで	1	第20図 1~17号土坑	29
1. 調査の目的	1	第21図 18~30号土坑	31
2. 調査の方法	1	第22図 溝跡	34
3. 調査の経過	1	第23図 掘跡、性格不明遺構	36
II 開発事業に係る調査	4	第24図 南台遺跡出土遺物	38
1. 宮遺跡V次	4		
2. 小桜館	10		
3. 小桜館(旧西置賜郡役所石疊)	12	表1 調査工程表	2
4. 遠藤館	16	表2 埋蔵文化財ヒアリング一覧	2
5. 南台遺跡	20	表3 ピット計測表	37

表 目 次

挿 図 目 次

第1図 調査箇所位置図	3
第2図 宮遺跡V次調査概要図	4
第3図 宮遺跡V次遺構配置図	5
第4図 宮遺跡V次遺構平面図・断面図	6
第5図 宮遺跡V次出土遺物	7
第6図 小桜館概要図	10
第7図 小桜館トレンチ概要図	11
第8図 小桜館調査概要図(石疊)	12
第9図 小桜館石疊平面図・断面図	13
第10図 遠藤館調査概要図	16
第11図 遠藤館遺構配置図	17
第12図 遠藤館遺構平面図・断面図	17
第13図 南台遺跡調査概要図	20
第14図 南台遺跡遺構配置図	22
第15図 1号住居跡	23
第16図 2号住居跡	24
第17図 3号住居跡	25
第18図 1・2号窓穴	26
第19図 3・4号窓穴	27

図 版 目 次

図版1 宮遺跡V次(1)	8
図版2 宮遺跡V次(2)	9
図版3 小桜館(個人宅地造成)	10
図版4 小桜館(旧西置賜郡役所石疊)(1)	14
図版5 小桜館(旧西置賜郡役所石疊)(2)	15
図版6 遠藤館(1)	18
図版7 遠藤館(2)	19
図版8 南台遺跡(1)	40
図版9 南台遺跡(2)	41
図版10 南台遺跡(3)	42
図版11 南台遺跡(4)	43
図版12 南台遺跡(5)	44
図版13 南台遺跡(6)	45

I 調査に至るまで

1. 調査の目的

本市では昭和57年から行った遺跡詳細分布調査を発端にし、市内全域にわたる分布調査を実施してきたところ現在まで216箇所の遺跡を把握しているが、近年時代の要求に伴い、遺跡が存在する地域にも開発がおよぶようになってきた。本調査は開発事業との調整を図り、事前に遺跡の保護にあたることを目的としたものである。対象となる開発事業の内容は本市が行う公共事業と、宅地造成をはじめとする民間開発事業が主体となる。

また、周知の遺跡はそのほとんどが表面踏査で確認したものである。そのため遺跡の範囲・性格・年代等を明らかにする目的から一部試掘調査を実施し、記録として保存にあたり遺跡台帳の整備に努めた。

2. 調査の方法

調査は内容・目的から次の方法で実施している。

(1) 現地踏査

遺跡の周辺が開発範囲に含まれる場合や、現在遺跡として登録されていない地域でも、開発事業予定区域が広範囲におよぶ場合には現地踏査、聞き取り調査を行い遺跡の有無の確認にあたり、開発事業と遺跡保護の調整にあたる。

(2) 試掘調査

周知の遺跡が開発事業予定区域に含まれる場合や、遺跡周辺に開発がおよぶ恐れがあるときには坪掘りやトレチ掘りを行い、遺構・遺物の広がりを確認し、さらに遺構検出面までの深さを把握し開発事業と遺跡保護の調整を図る。

また、遺跡台帳整備の目的から、これまで表面踏査による推定遺跡範囲に坪掘りやトレチ掘り、小規模な発掘調査を行い遺構・遺物の検出にあたり遺跡の範囲・性格・年代等を明らかにし、遺跡台帳の補筆にあたる。

(3) 立会調査

開発事業において遺跡におよぼす影響が軽微な場合は、工事施工に立ち会って調査を行う。発見された遺構・遺物は記録保存を行う。

3. 調査の経過

長井市教育委員会では、これまで行ってきた分布調査をもとに遺跡地図を作成しており、開発を担当する関係機関に地図を配布し、今後計画される各種開発事業にさきがけて埋蔵文化財に関するヒアリングを行い、必要に応じ上記の調査を実施した。また、民間開発についても隨時受付を行っており、開発に係る事前調査依頼の受け入れ態勢を組織し、同様の調査を行った。

その結果、本年度は5遺跡の調査を実施した。内訳は民間開発に係る調査が2件、公共事業に係わる調査が3件で道路工事等比較的規模の大きい調査が続いた。また、民間開発では個人宅地造成の問い合わせが増える傾向にある。

なお、現地調査の工程と、ヒアリングに係る調査の内容は次のとおりである。

調査工程表

表1

日程 内容	平成19年										平成20年		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
現地踏査													
試掘調査					■	■							
発掘調査	■			■	■		■	■	■				
報告書作成									■	■	■	■	

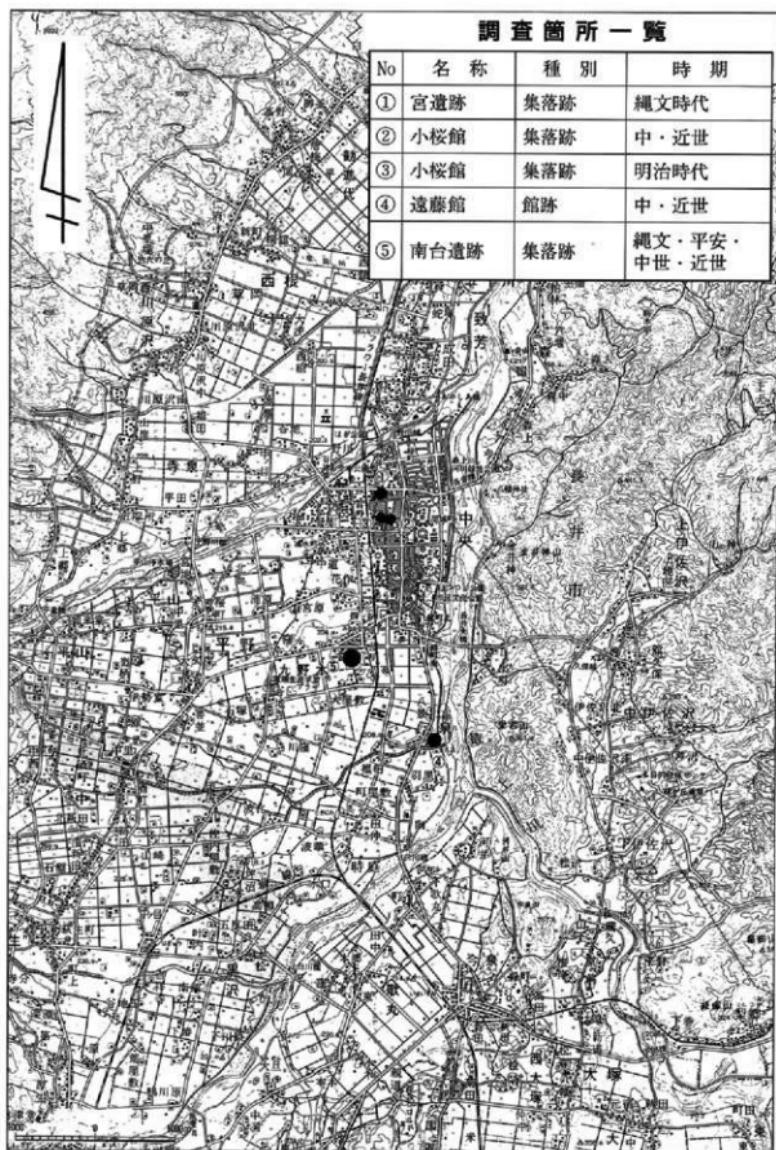
埋蔵文化財ヒアリング一覧

表2

事業種別	遺跡名	調査区分	種別	時期	備考
個人宅地造成事業に係る調査	宮遺跡	発掘調査	集落跡	縄文時代	民間開発
	小桜館	試掘調査	集落跡	中・近世	民間開発
公園整備事業に係る調査	小桜館	発掘調査	集落跡	明治時代	公共事業
道路改良事業に係る調査	遠藤館	発掘調査	館跡	中・近世	公共事業
	南台遺跡	発掘調査	集落跡	縄文・平安・中世・近世	公共事業

調査箇所一覧

No	名称	種別	時期
①	宮遺跡	集落跡	縄文時代
②	小桜館	集落跡	中・近世
③	小桜館	集落跡	明治時代
④	遠藤館	館跡	中・近世
⑤	南台遺跡	集落跡	縄文・平安・中世・近世



第1図 調査箇所位置図

II 開発事業に係る調査

1. 宮遺跡V次

所在地 長井市十日町地内

調査期間 平成19年7月19日～8月3日

起因事業 個人宅地造成事業

遺跡環境 長井市街地の中央部に位置し、江戸時代の舟運で栄えたところである。本遺跡は昭和30年代に県道の造成工事、昭和63年に土地区画整理事業、平成14年と17年に宅地造成と各種開発事業に伴い発掘調査を実施し縄文時代中期の遺跡として周知されている。

調査状況 発掘調査は開発事業における建物造成区域を対象として実施したもので、調査面積は200m²である。重機による表土層除去の後、手掘りで遺構・遺物の検出にあたった。

調査結果 調査区を斜に横切るように堀跡が検出されたほか、土坑6基、性格不明遺構1基、ピット36基を検出した。堀を境に内側と外側は約40～50cmの比高差があり内側が小高い地形となる。当該域は小桜館の北東隅と推定される。また、遺物は整理箱1箱で縄文土器、土師器、陶器、瓦が出土した。

以下、検出された遺構・遺物について記述する。

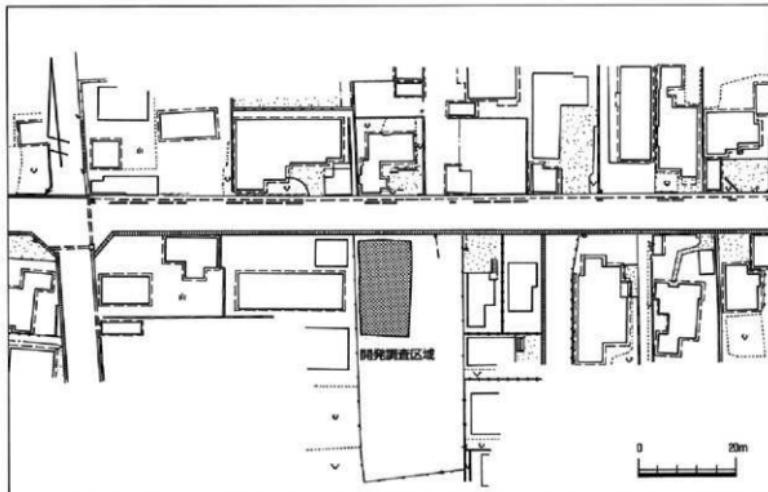
(i) 土坑

1号土坑（第4図）

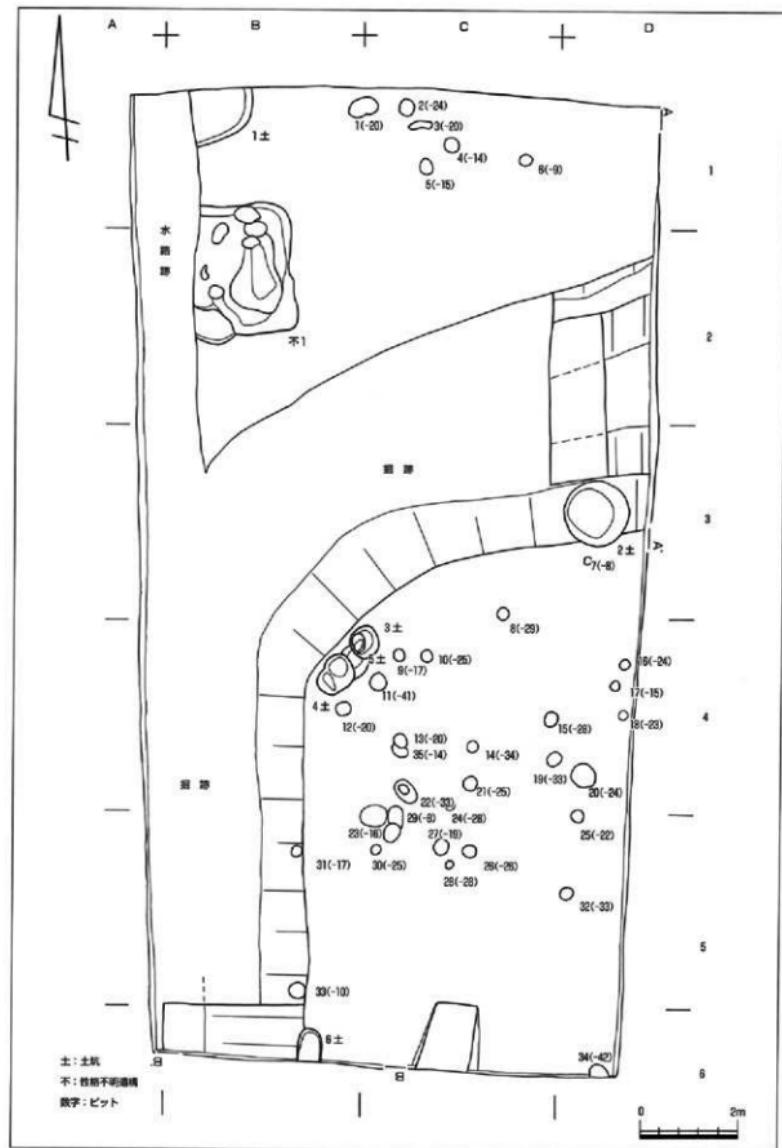
B-1に位置し、西は水路で搅乱を受け北は調査区外にのびている。平面形は不明であるが壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。遺物は検出されず時期は不明である。

2号土坑（第4図、図版1）

D-3区、高台と堀の間の斜面に位置する。平面形はほぼ円形を呈し底面中央がやや窪んだ形態である。



第2図 宮遺跡V次調査概要図



第3図 宮遺跡V次造構配置図

覆土は①暗褐色土、②灰茶褐色土：灰褐色土をブロック状に含む。③茶褐色土：褐色土をブロック状に含む。④灰褐色土：茶褐色土をブロック状に含む。⑤褐色土。

3～5号土坑（第4図）

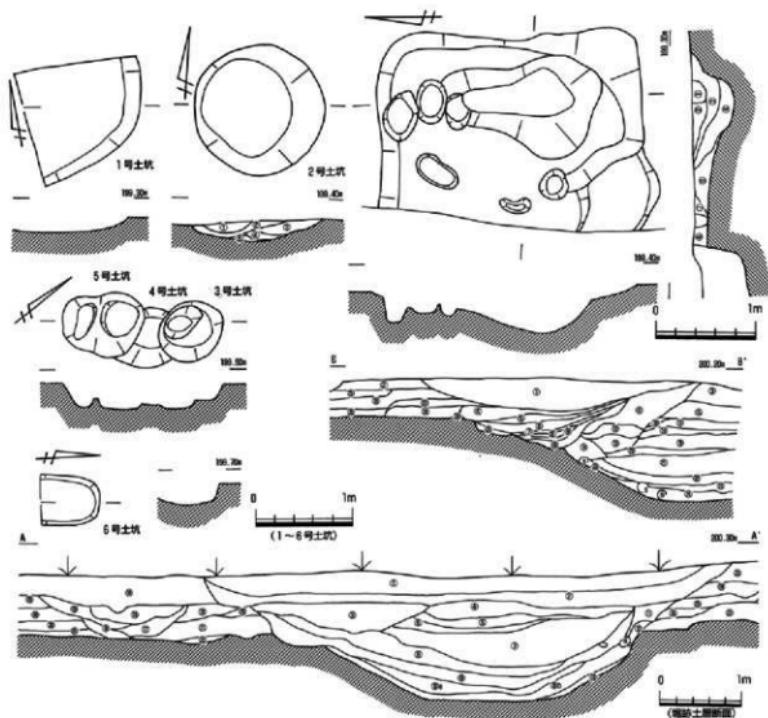
B・C-4区に位置する。3土坑は重複するが新旧関係は不明。3号は長軸68cm、短軸60cm、深さ26cm、平面形はほぼ円形を呈し底面に浅い掘り込みをもつ。4号は3・5号に切られ詳細は不明で、深さ21cm。5号は平面形が8字状を呈し、長軸83cm、短軸65cm、深さ26cmで、底面に2箇所の掘り込みをもつ。

6号土坑（第4図）

B-6区に位置し、南側は調査区外にのびる。傾斜地に茶かれ覆土から瓦が出土した。長軸63cm、短軸52cm、深さ23cm（いずれも現存値）。

（Ⅲ）性格不明遺構（第4図）

B-1・2区に位置し、西側は水路で擾乱を受けている。底面はピットや窪みで凹凸がある。覆土は①灰茶褐色土、②灰褐色土、③褐色土、④暗灰茶褐色土、⑤暗灰褐色土、⑥暗灰茶褐色土。



第4図 宮遺跡V次遺構平面図・断面図

(iv) 堀跡（第3・4図、図版1）

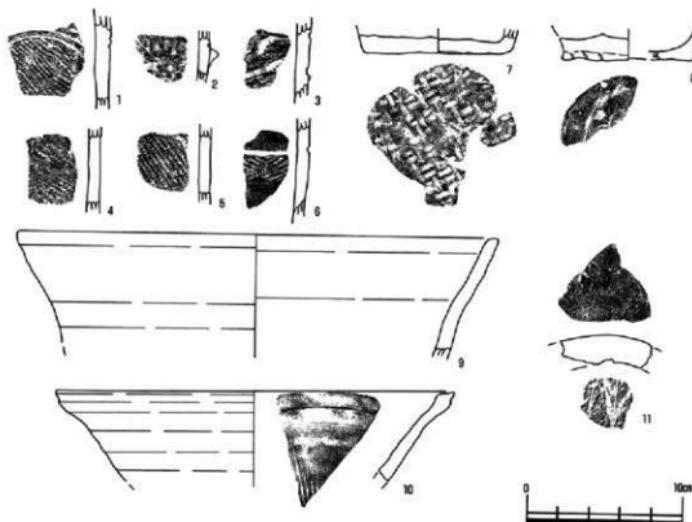
A～D-2～5区に位置し、東と南にのびると推測される。堀の形状は断面の観察から時代によって変化し今日に至っていることがうかがえる。覆土の堆積は次のとおりである。

A-A' ①客土、②暗茶褐色土（客土）、③灰茶褐色土、④黒褐色土（客土）、⑤暗褐色土（客土）、⑥黒褐色土（客土）、
 ⑦茶褐色土、⑧灰茶褐色土、⑨暗褐色土、⑩a 暗褐色土、⑪b 暗褐色土、⑫茶褐色土、⑬暗茶褐色土、⑭灰褐色土、
 ⑮暗褐色土、⑯黒褐色土、⑰灰褐色土、⑱灰茶褐色土、⑲暗褐色土、⑳灰褐色土、㉑灰茶褐色土、㉒暗灰褐色土、
 ㉓茶褐色土、㉔a 茶褐色土、㉕b 茶褐色土、㉖a 灰褐色土、㉗b 灰褐色土、㉘茶褐色土、㉙暗灰褐色土、
 ㉚暗茶褐色土、㉛暗褐色土、㉜灰褐色土

B-B' ①暗褐色土（客土）、②暗灰褐色土（客土）、③暗褐色土（客土）、④灰茶褐色土、⑤暗褐色土、⑥灰褐色土、
 ⑦暗茶褐色土、⑧茶褐色土、⑨灰茶褐色土、⑩暗茶褐色土、⑪暗褐色土、⑫灰茶褐色土、⑬暗褐色土、
 ⑭灰褐色土、⑮暗褐色土、⑯暗灰褐色土、⑰灰褐色土、⑱灰茶褐色土、⑲灰茶褐色土、㉑灰褐色土、㉒暗褐色土、
 ㉓暗赤褐色土、㉔暗灰褐色土、㉕褐色土、㉖暗茶褐色土、㉗暗茶褐色土、㉘暗茶褐色土

(v) 遺物について（第5図、図版2）

1～7は縄文土器。1は半截竹管による曲線文が描かれ、2は隆帯の上下に縄の圧痕が施され、3は粘土絆で曲線が描かれそれに沿って沈線が施文される土器で、1は大木7b式土器、2・3は大木8a式土器に比定され、4・5・7（網代痕が付く土器底部）はそれらに伴う土器。6は縄文施文部を沈線で区画する土器で縄文後期に比定される。8は爪形が付く土師器の底部で、底面に木葉痕が付く。9は内耳鍋で表面にススが付着している。戦国時代の所産である。10は擂鉢の口縁で产地は岸窯（福島県）で時期は17世紀代。11は瓦で灰色を呈し胎土に滑石の小粒子を多く含み裏面にきめ細かな布の圧痕が付く。時期は中世。



第5図 宮遺跡V次出土遺物



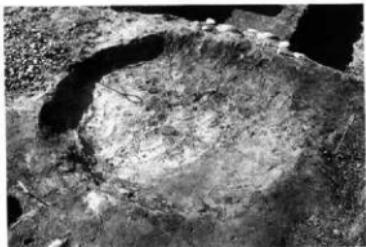
調査風景（北から）



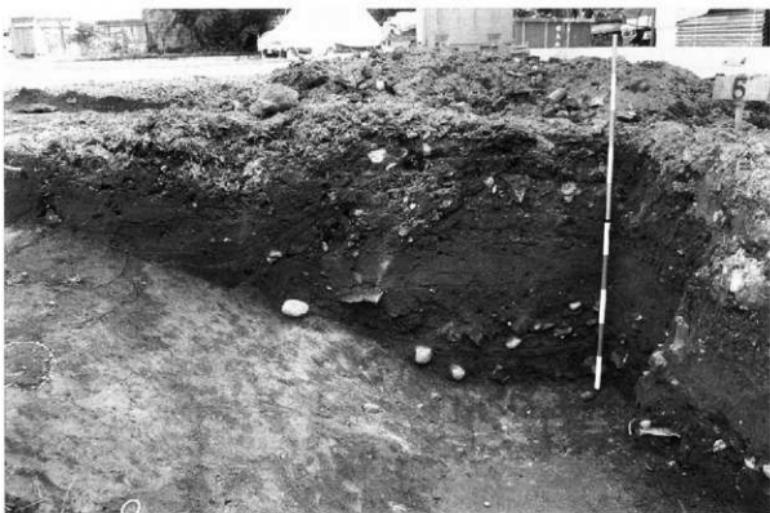
遺物出土状況



2号土坑



2号土坑完掘

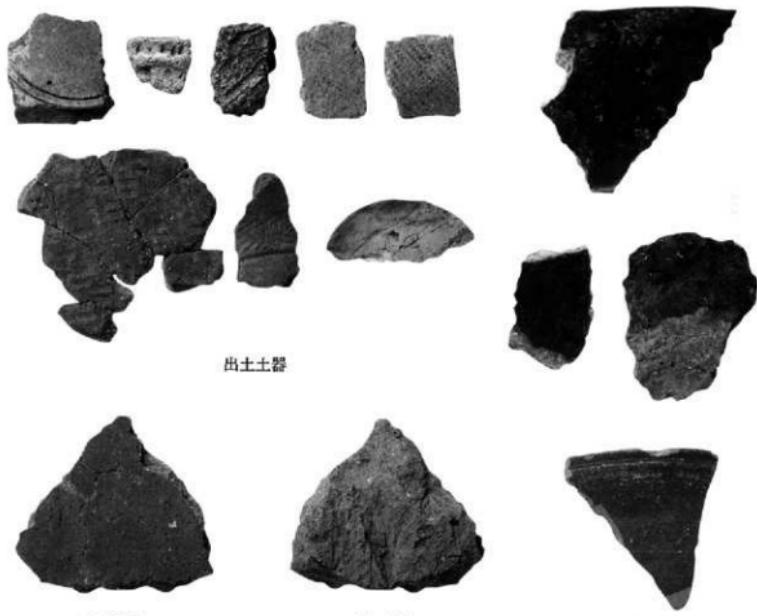


掘跡・土層断面

図版1 宮遺跡V次（1）



遺構検出状景（南から）



出土土器

瓦（表）

同（裏）

出土土器

図版2 宮遺跡V次（2）

2. 小桜館

所在地 長井市十日町内

調査期間 平成19年8月6日

起因事業 個人宅地造成事業

遺跡環境 長井市街地の中心部に位置する。旧西置賜郡役所の東に隣接する区域で、現在は宅地跡地となっているが調査区東辺には江戸時代から伝わる学門が残っており、茅蔵があった土地と伝えられている。個人宅地造成が計画されたことから試掘調査を実施した。

調査状況 開発予定区域に $1 \times 5 \sim 10m$ のトレンチを任意に10箇所設定し重機を用いて地山層まで掘下げ造構・遺物の検出にあたった。

調査結果 各トレンチで円形や梢円形プランの造構が検出された。等間隔に並んだ円形プランのなかには拳大から人頭の礫が検出され、建物跡の礎石と考えられる造構も存在する。

工事の施工にあたり開発者側と遺跡保護について十分な協議が必要である。



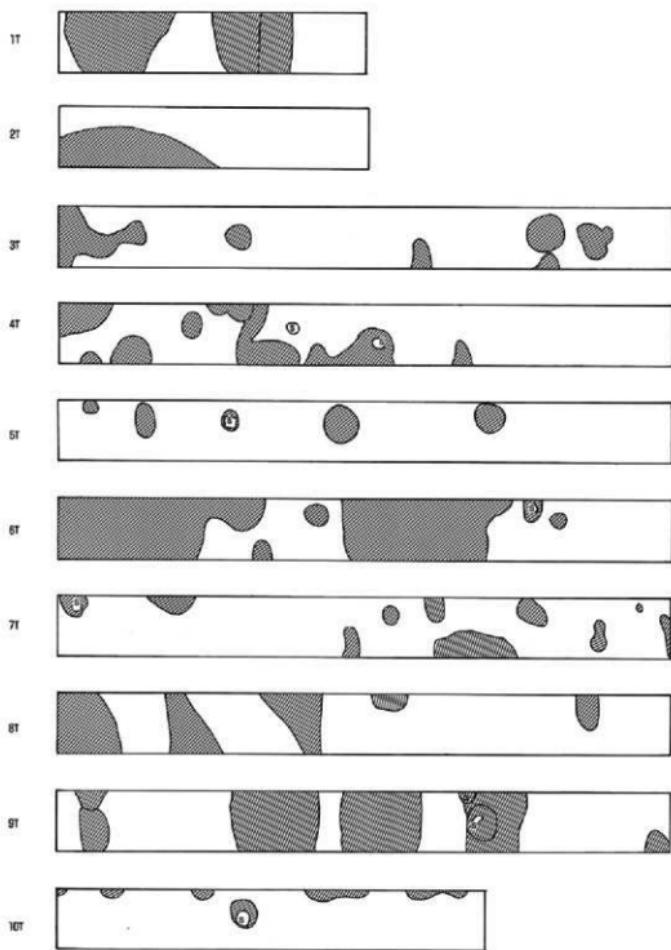
上：遺跡近景（北西から） 下：9トレンチ



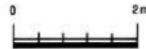
図版3 小桜館（個人宅地造成）



第6図 小桜館概要図



(左側が北方向)



第7図 小桜館トレンチ概要図

3. 小桜館（旧西置賜郡役所石壙）

所在 地 長井市十日町地内

調査期間 平成19年4月19日～23日

起因事業 公園造成造事業

遺跡環境 一帯は戦国時代の武将片倉小十郎の館跡と伝えられ、埋蔵文化財の視点から戦国期の館跡として周知されていた。長井市の中央部に位置するため、古くから官営の施設が置かれた場所でもある。長井市では、小桜館周辺整備として平成18年度から小桜館前広場整備事業を開始しするにあたり遺跡保護の観点から協議と試掘調査を行ってきた。

調査状況 石壙の一角が発見されたため、重機を用いて表土を除去しながら全体の範囲を確認し、手掘りで精査を行い石壙の検出にあつた。

調査結果 石壙は旧郡役所の玄関前から東側にかけて検出され長さ17.37m、幅2.8m（東端は5.6m）の石壙を検出した。素材は凝灰岩の切石を用い、大きさは長さ90cm、幅30cm、厚さ12cmを基準とし千鳥模様に敷詰められている。東端部は裏状の広がりを呈し門柱の台座も設けられているが石のならびが不規則となる。何らかの理由で敷き直しが行われたものと推測される。また、一般に建物と石壙の長軸は「T」に設置されるが、この石壙の長軸と建造物の長軸は垂直に交わっていない。石壙とそこから東に広がる道路とまちなみは一直線に結ぶことができるが建物の長軸（南北軸）が約6度東に振れる配置となる。この原因については不明である。また、切石に使われている凝灰岩は風化に弱く、加圧や凍結による表面の剥がれ著しく、また、折損箇所も隨所に見られた。

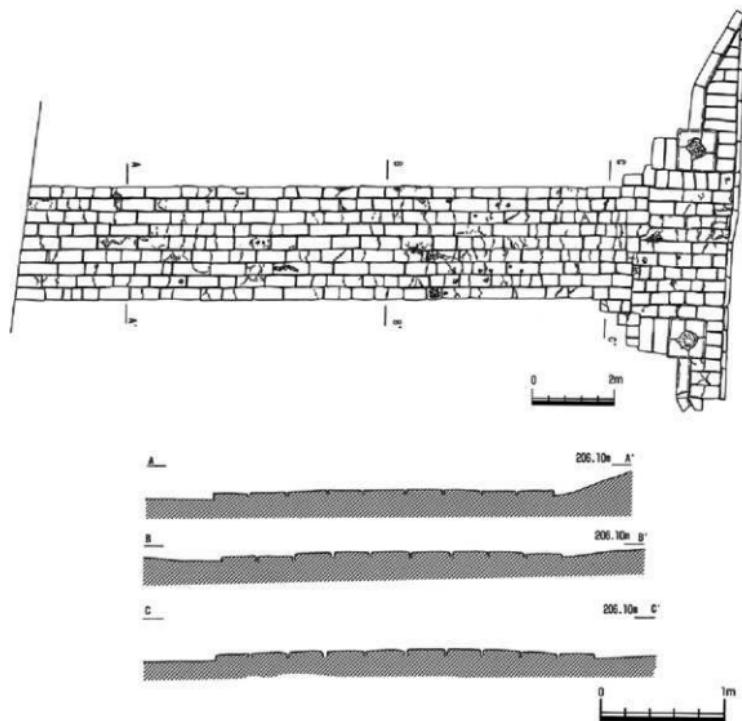


第8図 小桜館調査概要図（石壙）

旧西置賜郡役所 明治11年7月、郡区町村編成法が発布され、山形県は11郡に分けられ各郡の中心に郡役所が設置された。県内で現存する建築は東村山（天童市：明治12年）、西村山（寒河江市：明治11年）、東田川（旧藤島町：明治20年）、西田川（鶴岡市：明治14年）、西置賜（長井市：明治11年）の5棟である。

旧郡役所は竣工から大正14年まで西置賜郡役所として使用され、その後、県及び中央官庁の出先機関の事務所や西置賜地方事務所、長井ダム工事事務所として利用された後、平成8年3月28日、長井市の文化財として指定を受け利活用がはかられている。

保存について 工事の設計では石垣の位置に管が埋設される予定であったが、石垣は写真等から明治時代に構築されたものと推定され文化財としても貴重なものである。そのため工事の主管課である市建設課と保護について協議を行ったところ、石垣は盛り土で保存されることになった。風化に弱い凝灰岩の保存は困難であるため保護・活用について有識者並びに関係者で協議を行い、石垣を写真と図面による記録保存とし、その一部を小桜館に展示している。また、門柱は将来復元する方向で整備計画が進められている。



第9図 小桜館石垣平面図・断面図



石疊検出状況（東から）



石疊とまちなみ（西から）



正面階段（下二段まで埋っていた）

図版4 小桜館（旧西置賜郡役所石疊）(1)



石疊検出状況（西から）



石疊東端



門柱台座

図版5 小桜館（旧西置賜郡役所石疊）（2）

4. 遠藤館

所在地 長井市泉地内

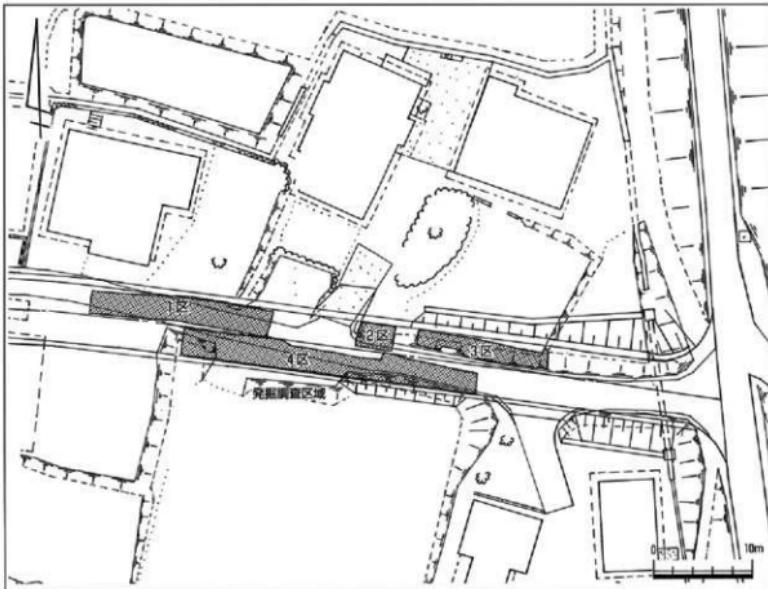
調査期間 平成19年10月1日～23日

起因事業 市道改良工事

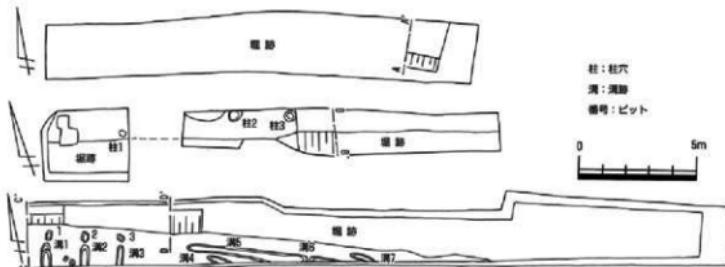
遺跡環境 長井市街地の南東部、最上川と福田川によって形成された河岸段丘上に位置し平成3年の分布調査で発見された遺跡である。本遺跡は昭和40年代の土地改良で破壊を受けたが、調査区西南には土塁跡の高まりと堀跡の痕みが若干残っている。このたびの調査は市道拡幅工事と並行して実施したものである。

調査状況 東西にのびる開発予定区域を拡幅道路のセンターラインを基準に南北に二分し、北側区域の発掘調査を行った後埋戻しを行い、南側の調査にあたった。ただ、人家の出入り口周囲は安全性確保の立場上調査範囲から除外した。したがって調査区域おむねは1区 $3 \times 18m$ 、2区 $2.5 \times 3.5m$ 、3区 $2 \times 13.5m$ 、4区 $3 \times 30m$ の4区域で、発掘面積は約 $180m^2$ である。

調査結果 各調査区で砂礫層が検出され、1区は調査区全面で、2区と3区は調査区の南側、4区は北東域にかけて確認した。砂礫層にトレンチを設定し深掘りを行ったところ、当該層はすべて同質のもので地山層において道路のセンターラインに向けて傾斜が認められた。すなわち当該調査区は砂礫層によって埋め立てられた区域と想定される。明治期の地積図に照らし合わせてみると現道部分は水路の色付けがなされている。遺跡の性格からすると、当該調査区は堀跡の場所に砂礫を埋め立てて道路として使用されていたものと考えられる。2・3区で礎石を伴う柱穴が3基検出、4区でピット5基と溝状遺構が7条検出された。遺構の詳細は次のとおりである。



第10図 遠藤館調査概要図



第11図 遠藤館遺構配置図

(Ⅰ) 柱穴 (第11・12図、図版6)

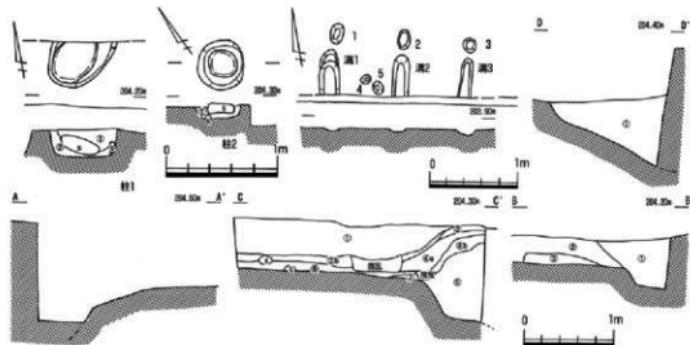
1号柱穴は明確な掘り方は確認されなかつたが直径30cmの偏平な砾である。2号柱穴は梢円形を呈し偏平砾を伴い確認面からの深さは25cmを測る。覆土は①暗茶褐色土、②暗灰褐色土。3号柱穴は長径45cm、短径42cm、深さ10cmを測り、偏平砾を伴う。覆土は①暗茶褐色土。3基の柱穴の間隔は2.5mの倍数にあり、柱穴の配置から建物跡の可能性がある。

(Ⅱ) 溝状遺構 (第11・12図、図版7)

1～3号は南北方向に、4～7号は東西方向にのびる。いずれも遺構底面には長軸方向に対し半月形の掘り込みが垂直方向に確認された。鋤や鍬による掘り込みと考えられ、当該溝状遺構は耕作痕と推定される。

(Ⅲ) 堀跡 (第11・12図、図版6・7)

東西方向にのびる堀跡と考えられるが、東端・西端は確認されていない。覆土はB-B' ①砂礫層、②暗茶褐色土、③灰茶褐色土、C-C' ①褐色土：現代の客土、②灰茶褐色土：道の盛り土、③a 暗茶褐色土：道の斜面の表土、③b 暗茶褐色土：旧表土、④a 灰茶褐色土：小砾を若干含む、④b 灰茶褐色土：やや大きめの砾を含む、⑤砂礫層：堀を埋めた土砂、⑥灰褐色土、⑦赤茶褐色土、D-D' ①砂礫層。



第12図 遠藤館遺構平面図・断面図



調査前（西から）



調査前（東から）



荒掘状況



右同



堤跡土層断面



調査状況（東から）



礫石検出状況



半截状況

図版6 速藤館（1）



堀跡検出状況



堀跡土層断面



遺構検出状況



完掘状況

図版7　造藤館（2）

5. 南台遺跡

所在地 長井市台町、九野本字和台・遠藤屋敷

調査期間 平成19年10月29日～12月14日

起因事業 市道改良工事

(1) 調査に至るまでの経過

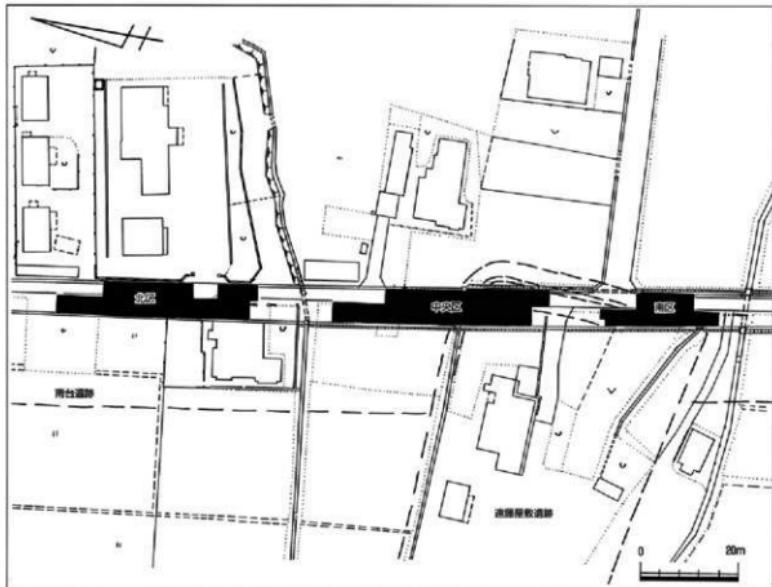
南台遺跡は昭和50年代に出土したといわれる重ね焼きの須恵器や完成品の土師器が伝わっていたが、出土地点が不明なため地形的な特徴から河岸段丘一帯を遺跡範囲ととらえ古墳時代から平安時代の遺跡として登録されてきた。

平成16年頃から市道大屋敷2号線の改良構想が打ち出されたため、長井市建設課と遺跡保護の協議を重ねてきたところ、遺跡がおよんでいない北端と南端部から改良工事を行い遺跡範囲の西縁にあたる工事区域中央部は試掘調査の結果をもとに保護対応にあたることとした。

平成19年8月、当該改良工事が具現化したことを受け現道に沿って試掘調査を実施したところ調査区北側で土坑や柱穴、南側で堀跡が検出され若干の遺物も出土し、遺跡の範囲も西側に広がるものと推定されるため長さ140m、幅6mの範囲を調査対象区域として642m²にわたり発掘調査を実施し記録保存にあたった。

(2) 調査の方法と経過

現地調査は平成19年10月29日から12月14日まで実施し、実働日数は22日間である。調査を実施するにあたり地域住民の生活道を確保する必要があるため現道を片側通行とし、拡幅工事と並行して発掘調査を実施し



第13図 南台遺跡調査概要図

た。すなわち拡幅道路のセンターラインを基準に開発区域を東西に二分し西側区域の発掘調査を行った後埋め戻しを行い、東側の調査にあたった。ただ、人家の出入り口や交差路、水路周辺は事故防止および水源確保のため調査範囲から除外した。したがって小範囲ごとに粗掘り・精査・発掘・測量・埋め戻し・土木工事という工程を繰り返しながら調査を実施したため空白部を残す調査範囲となったが、方法や手順は從来どおりの発掘調査である。また、調査区を北から順に北区、中央区、南区と称した。

(3) 遺跡の立地と環境

(i) 地理的環境

南台遺跡は長井市街地の南西部に位置し、小字名が示すように高台に立地する。遺跡は最上川によって形成された南北にのびる河岸段丘上に営まれ、標高は約205mを測り低地との比高さは高いところで2mに達する。段丘東縁に沿って東西200m、南北650mの広範囲におよぶ遺跡には西から東に向かって流れる小河川の發達が著しく、長さ140mの調査区域内に4条の小川が最上川に向かって流れている。また、調査区北端部では幅約25mにわたり東西にのびる湿地の痕跡が残り、工事用の深掘り断面では泥炭質の黒色土の落込みが確認され旧河川跡と考えられ、当該調査区域は旧河川の南側に広がる高台と推定される。南台遺跡はこれまで単体の段丘面に位置する遺跡として把握されていたが、詳細に踏査を行ったところ遺跡中央部において段差が確認された。畑地となっているところでは耕作で均されたためか高低差は見られないものの、段差は蛇行しながら既存の段丘と並走するように北西→南東方向に連なっていることから段丘と考えられる。また、小字名においてこの段丘を境に発掘区域を含む西側地域を和台と称し南台と一線を画し、遺構や遺物の内容も南台遺跡とは異なりをみせている。出土資料の広がりによっては新たな遺跡の存在が予想される。

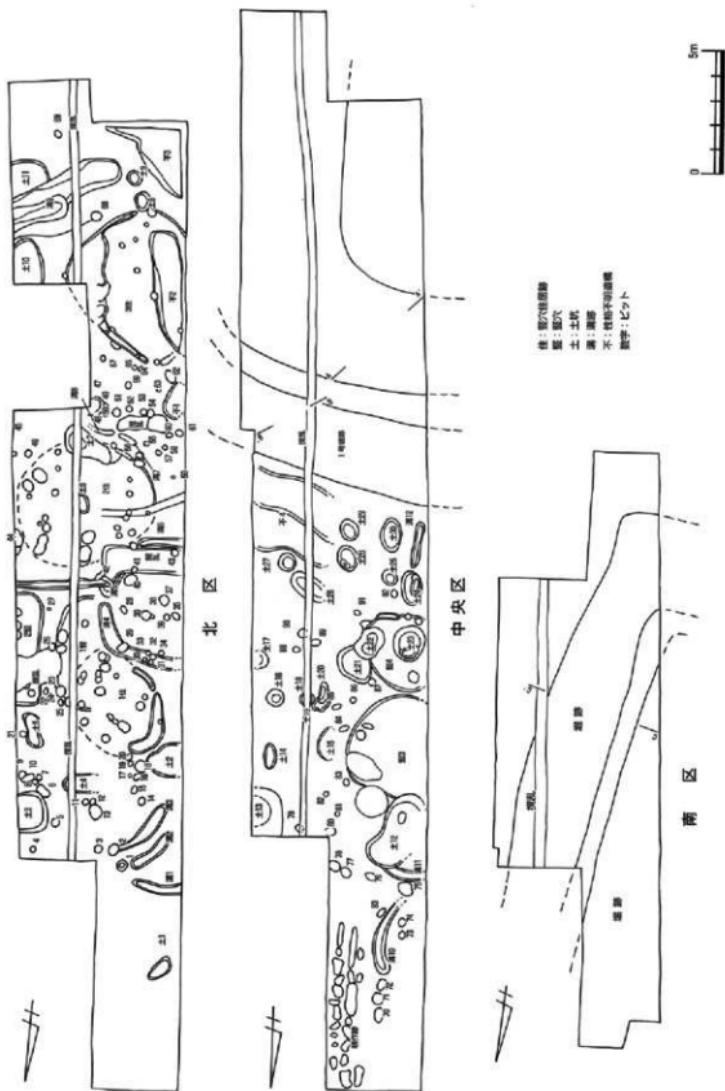
(ii) 歴史的環境

当方は鎌倉時代頃から長井郷と記され米沢地域を上長井、長井市周辺を下長井と称した。戦国時代から江戸時代にかけて伊達・蒲生・上杉の所領に含まれ穀倉地帯の一角を担い、江戸期に入り舟運が発達すると最上川沿いに船着場が営まれるようになる。しかし、隣接する白鷹町の黒滝とよばれる一帯は岩盤で川底も浅く難所のひとつとされていたが、元禄年間に浅瀬の掘削工事が行われ上流域にあたる長井地方においても水量に左右されることなく舟の往来が可能になり舟運による交易で栄えるようになった。

長井市は旧宮村と小出村が核となり発展したまちであるが、それぞれの村に舟場が営まれまちなみが形成されてきた。南台は旧小出地区の南西部にあたり調査区の北300mには馬街道とよばれる旧越後街道が通り、近年まで馬の飼育がみられたところもある。主要道路の開発で脇道となってしまったが現在でも市道の名称として馬街道線が使われ、地元の台町地区では石碑を建てるなど保存運動に取り組んでいる。

また、遺跡保護の立場においても昭和50年代採集といわれる重ね焼きの須恵器や土師器の出土を発端に、広範囲におよぶ南台遺跡は過去に数回の開発工事が計画され発掘調査を実施してきた。おもなものをあげると平成12年に大規模宅地造成に伴う発掘調査が行われ平安時代の住居跡や江戸時代前期の掘立柱建物跡や耕作痕等が検出されたほか、平成18年に個人宅地造成に係る発掘調査で古墳時代後期の竪穴式住居跡2棟が検出され多くの土師器が出土した。また、平成13年には南西に隣接する小山遺跡が基盤整備事業に含まれることから県教委により発掘調査が実施され縄文時代・平安時代の集落跡が検出されている。

第14図 南台道路沿線配置図



(4) 検出された遺構

発掘調査で検出された遺構は、竪穴住居跡3棟、竪穴4棟、土坑30基、溝跡12基、ピット93基、堀跡2条、耕作痕等があり、北区で竪穴住居跡、竪穴、土坑、溝跡、ピット、中央区で土坑、溝跡、堀跡、ピット、耕作痕、南区で堀跡と、調査区域によって検出遺構の偏りが見られる。

(1) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は調査区の北側で3棟検出され、平面形が楕円形や隅丸方形を呈する。遺構は耕作や基盤整備による搅乱ではほとんどが削平を受けていたが、周溝や柱穴の配置それに覆土の存在から竪穴住居跡とした。

1号住居跡（第15図、図版8）

遺存状況 遺構の西側は基盤整備や耕作による搅乱を受けたものと思われ、検出された覆土の堆積は浅く遺存状況は悪い。また、南東部は1号竪穴と重複し本住居跡が古い。

平面形 周溝及び柱穴の配列から楕円形と推測される。

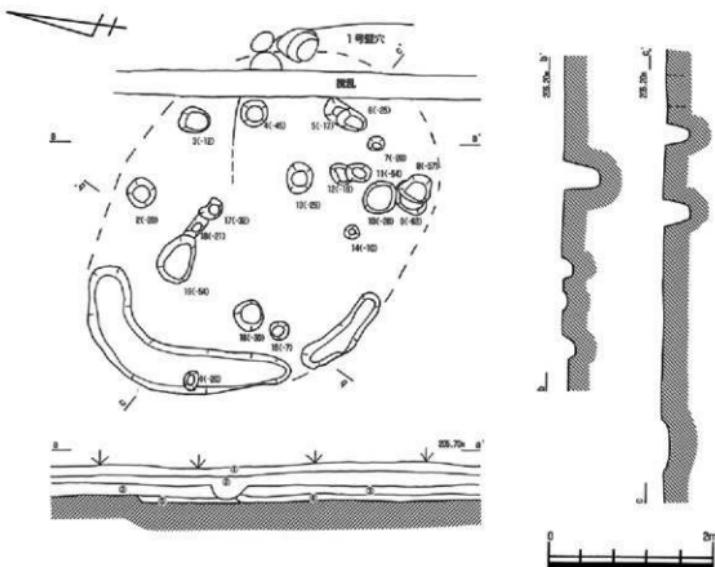
規模 推定で東西3.6m、南北4.3mを測る。

壁 断面の土層堆積から開きぎみに立ち上がるものと推測される。

床 面 褐色地山層を掘り込み、ほぼ平坦面を呈する。

柱 穴 19基検出され深い掘り込みをもつが、主柱穴の配置等不明である。

炉 跡 検出されなかった。



第15図 1号住居跡

周溝 深さは3~9cm、深さ25~60cmを測る。

土 ①暗茶褐色土：旧道路。②暗茶褐色土：旧道路の敷き砂利。③灰茶褐色土：旧水田の耕作土か。

④暗褐褐色土：部分的に褐色土を霜降状に含み粘質でしまりある土質。1号竖穴の覆土。⑤暗灰茶褐色土：粘質でしまりある土質。本住居跡の覆土。

出土遺物 床面と周溝から縄文土器が3点出土した。

時 期 出土遺物から出土遺物から縄文時代中期に属すると推測される。

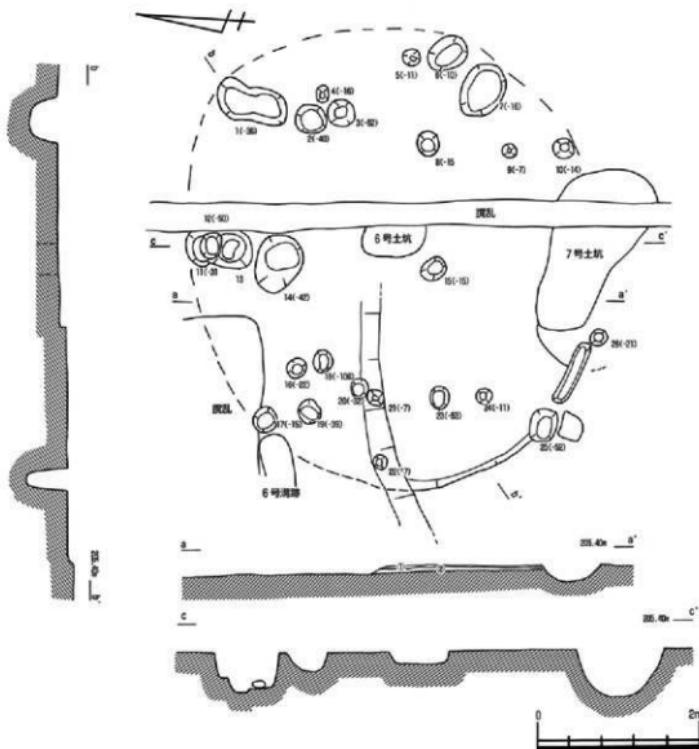
2号住居跡（第16図、図版9）

遺存状況 基盤整備や水道管理設で搅乱を受けている。6・7号土坑と重複するが本住居跡が古い。

平面形 ほぼ橢円形を呈するものと推測される。

規 模 推定で東西5.7m、南北4.8mを測る。

開きぎみに立ち上がるものと推測される。



第16図 2号住居跡

床	面	褐色地山層を掘り込み、ほぼ平坦面を呈する。
柱	穴	26基検出されたが柱配置は不明である。
炉	跡	このたびの調査では検出されなかった。
覆	土	①暗灰褐色土：粘性を帯びしまりある土質。②灰褐色土：黒褐色土の塊を若干含む砂質土。
出土遺物	検出されなかった。	
時期	不明	

3号住居跡（第17図、図版9）

遺存状況 住宅建設や水道管理設で擾乱が認められる。2号性格不明造構と重複するが本住居跡が古い。また、炉跡やカマドは検出されなかった。

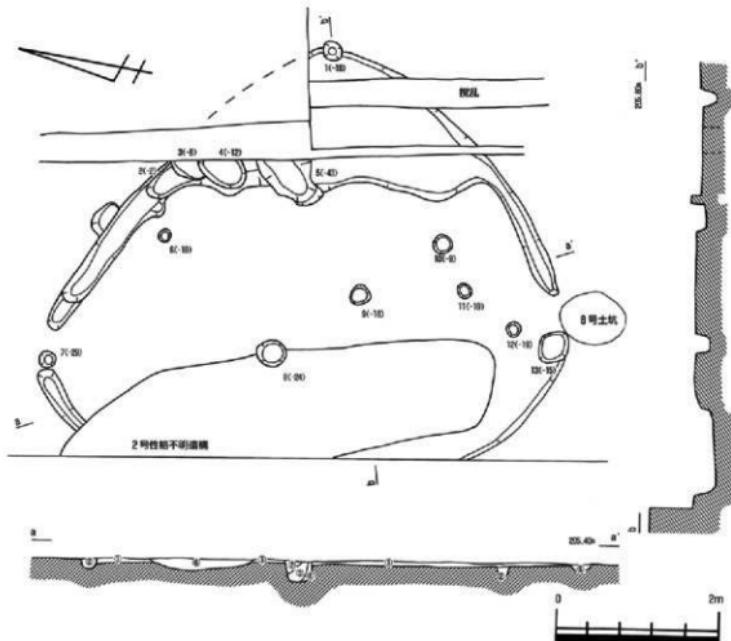
平面形 圓丸方形を呈するものと推測される。

規 模 長軸5.9m、短軸5.1mを測る。

壁 検出されなかった。

床面 ほほ平坦面を呈する。

柱 穴 13基検出された。柱配置は不明であるが長軸方向に沿って3基のピットが列をなして検出された。



第17図 3号住居跡

覆 土 ①灰茶褐色土：粘質でしまりあり。②暗灰褐色土：粘質土。③黒褐色土：粘質土。④灰茶褐色土：砂質土でしまり弱い土質。⑤暗褐色土：粘質でしまりある土質。⑥暗茶褐色土：2号性格不明遺構の覆土。
出土遺物 検出されなかった。

時期 不明。

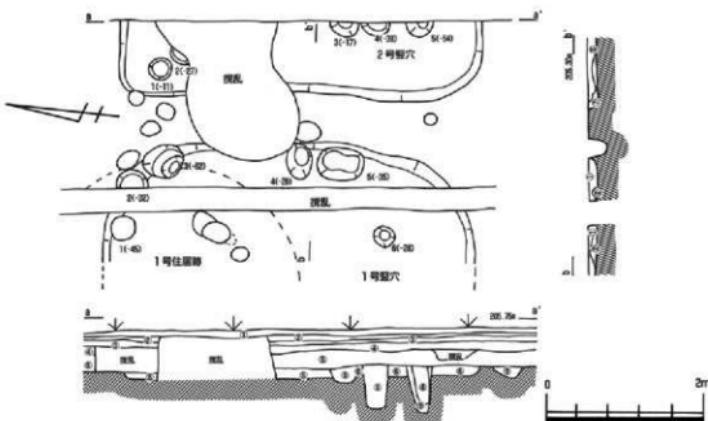
(ii) 壊穴

壊穴は擾乱を受けているが調査区の北区で2棟、中央区で2棟検出され、平面が方形を呈するものと円形を呈するものがある。また、炉跡やカマド、焼土、それに遺物は検出されず帰属時期は不明である。

1号壊穴（第18図、図版9）

遺存状況 基盤整備や水道管埋設で擾乱が認められ、1号住居跡と重複するが本壊穴が新しい。

平面形 隅丸方形を呈するものと推測される。



第18図 1・2号壊穴

規模 南北4.76m、東西 不明

壁 ゆるやかに立ち上がる。

床面 ほぼ平坦面を呈する。

柱穴 6基検出されたが柱配置は不明である。

覆土 ①灰茶褐色土：黒褐色土をブロック状に含む粘質土。②灰褐色土：粘質土。

2号壊穴（第18図、図版9）

遺存状況 住宅建設で擾乱が認められる。

平面形 隅丸方形を呈するものと推測される。

規模 南北4.6m、東西 不明

壁 面 ゆるやかに立ち上がる。

床 面 ほぼ平坦面を呈する。

柱 穴 5基検出されたが柱配置は不明。

覆 土 ①暗茶褐色土：表土層。②青灰色土：客土層。③褐色土：客土層。④暗褐色土：砂礫層。⑤灰茶褐色土：粒子細かくしまり弱い土質。⑥暗灰茶褐色土：しまりある粘質土で造構覆土。⑦灰褐色土：造構覆土。⑧黒褐色土：ピット覆土。⑨暗灰茶褐色土：ピット覆土

3号竪穴（第19図、図版11）

遺存状況 耕作等で擾乱が認められる。12号土坑と重複するが本造構が古い。

平面形 不正円形を呈するものと推測される。

規模 南北4.2m、東西 不明

壁 面 ゆるやかに立ち上がる。

床 面 ほぼ平坦面を呈する。

柱 穴 3基検出されたが柱配置は不明。

覆 土 ①暗灰茶褐色土：褐色土をブロック状に含む。②灰茶褐色土：粘質でしまりある土質。

4号竪穴（第19図）

遺存状況 耕作で擾乱が認められる。21・22・23号土坑と重複するが本造構が古い。

平面形 隅丸方形を呈するものと推測される。

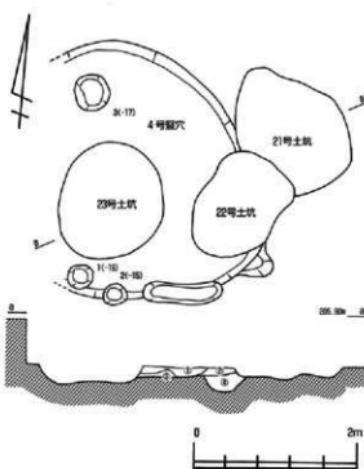
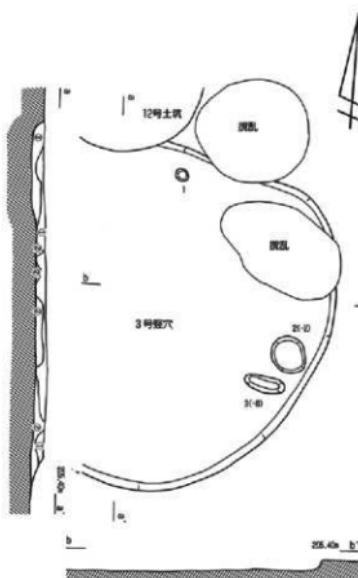
規模 南北4.6m、東西 不明

壁 面 ゆるやかに立ち上がる。

床 面 ほぼ平坦面を呈する。

柱 穴 5基検出されたが柱配置は不明。

覆 土 ①灰茶褐色土：粘質でしまりあり。②灰茶褐色土：灰褐色土をブロック状に含む。③灰褐色土：粘質でしまりあり。④暗灰褐色土：粘質でしまりあり。



第19図 3・4号竪穴

(Ⅲ) 土 坑

土坑は調査区北側と中央部から30基検出された。形状は円形・楕円形・瓢箪型とバラエティーに富み大きさも0.6~2.5mと多岐にわたるが、遺物の出土がなく時期が特定される遺構が少ない。

1号土坑（第20図、図版9）

北区に位置し、平面形は不整楕円形を呈し平坦な底面を有する。長軸1.16m、短軸0.59m、確認面からの深さ10cmを測り、長軸は北東方向を指す。覆土は①黒褐色土：粘質で灰褐色土をブロック状に含む。②灰褐色土：砂質土。遺物の出土がなく時期は不明。

2号土坑（第20図）

北区に位置し、平面形は不整形を呈し遺構の西側は調査区外にのびている。底面は緩い起伏を有し、南北軸1.45m、東西軸1.25m（現存値）、確認面からの深さ10cmを測り、長軸は東西方向を指すものと推測される。覆土は①暗灰褐色土：黒褐色土をブロック状に含む。②黒褐色土。遺物の出土がなく時期の特定にはいたっていない。

3号土坑（第20図、図版9）

北区に位置し、平面は隅丸方形を呈し遺構の東側は調査区外にのびている。平坦な底面を有し、南北軸1.7m、東西軸1.15m（現存値）、確認面からの深さ15cmを測る。覆土は①黒褐色土：粘質でしまりあり。②黒褐色土：灰褐色土の小ブロックを若干含む。遺物の出土がなく時期の特定にはいたっていない。

4号土坑（第20図）

北区に位置し、水道管理設と土木工事で遺構は搅乱を受けている。平面は楕円形を呈するものと推測され、東西軸1.15m（現存値）、南北軸0.85m、確認面からの深さ8cmを測る。遺物の出土がなく時期は不明。

5号土坑（第20図）

北区に位置し、平面形は不整楕円形を呈し平坦な底面を有する。長軸1.4m、短軸0.65m、確認面からの深さ7cmを測り、長軸は北北西方向を指す。覆土は①灰茶褐色土：暗茶灰褐色土をブロック状に含む粘質土。②灰褐色土：砂質土。遺物の出土がなく時期は不明。

6号土坑（第20図）

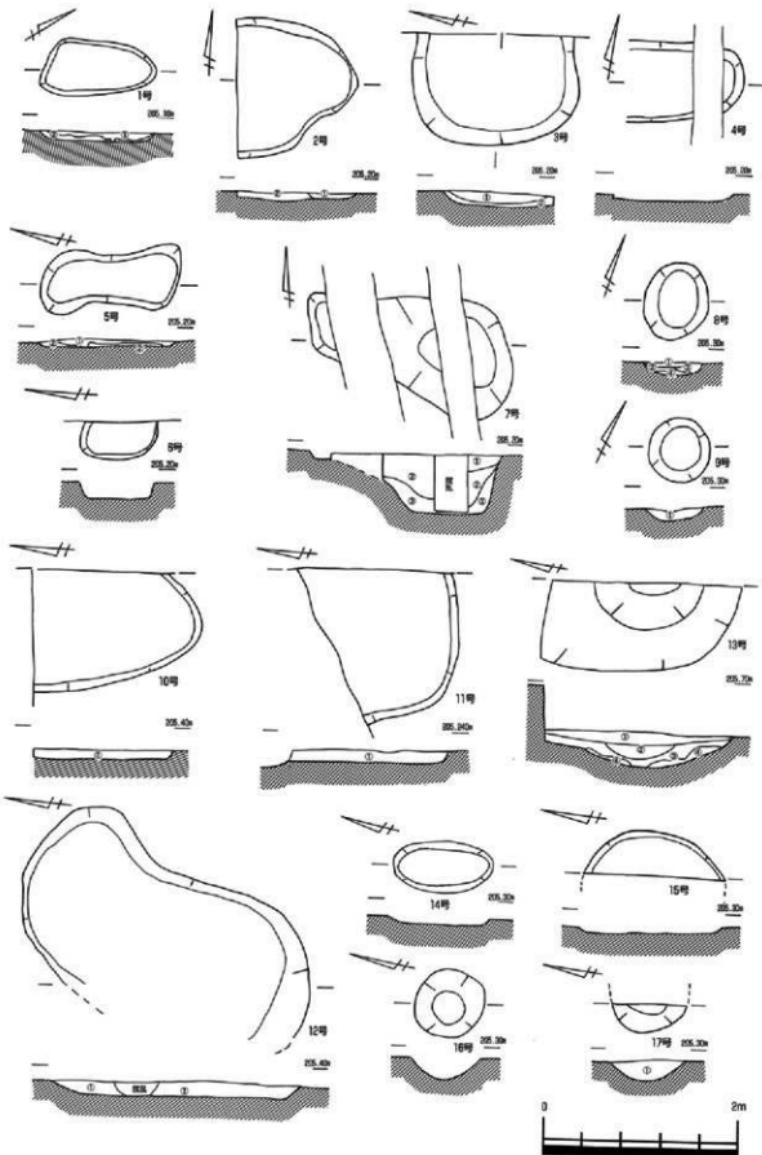
北区に位置し、水道管理設で遺構の東側は搅乱を受けている。平面は楕円形を呈するものと推測され、東西軸0.38m（現存値）、南北軸0.78m、確認面からの深さ17cmを測る。2号住居跡の中央部に位置するが遺構の新旧関係及び時期は不明。

7号土坑（第20図、図版9）

北区に位置し、水道管理設で遺構の中央部は搅乱を受けている。長軸2.15m、短軸1.1m、確認面からの深さ62cmと深く、長軸は東西方向を指す。覆土は①暗灰茶褐色土：粘質でしまりあり。②暗灰茶褐色土：灰褐色土をブロック状に含む。③暗灰茶褐色土。遺物の出土がなく時期は不明。

8号土坑（第20図）

北区に位置し、平面は不整楕円形を呈し底面は緩い起伏を有する。長軸0.8m、短軸0.65m、確認面からの深さ13cmを測り、長軸は北方向を指す。覆土は①暗青灰色土：しまりありかたい土質。②灰褐色土：褐色土をブロック状に含む。③暗灰褐色土：あまりありかたい土質。④灰褐色土：砂質土。遺物の出土がなく時期の特定にはいたっていない。



第20図 1～17号土坑

9号土坑（第20図）

北区に位置し、平面は不整円形を呈し平坦な底面を有する。長軸0.65m、短軸0.62m、確認面からの深さ11cmを測り、長軸は北北西方向を指す。覆土は①暗灰褐色土：暗褐色土をブロック状に含む。

10号土坑（第20図）

北区に位置し、遺構の北・東側は調査区外にのびるため平面形や大きさは不明である。確認面からの深さは11cmで平坦な底面を有する。覆土は①黒褐色土：粘性を帯びかたくしまった土質。

11号土坑（第20図）

北区に位置し、遺構の北側は9号溝跡と重複し本土坑が古い。東側は調査区外にのびるため平面形や大きさは不明である。確認面からの深さは13cmで平坦な底面を有する。覆土は①黒褐色土：粘性を帯びかたくしまった土質。

12号土坑（第20図）

中央区に位置し、11号溝跡、6号竪穴と重複し本土坑が新しい。遺構西側は擾乱を受けているが平面形は不整梢円形を呈すると推測され、長軸3.23m、短軸1.6m、確認面からの深さ16cmを測る。覆土は①暗灰茶褐色土。遺物は検出されず時期は不明。

13号土坑（第20図、図版11）

中央区に位置し、北側と南側は調査区外に広がるため平面形や大きさは不明である。確認面からの深さは36cmを測る。覆土は①暗茶褐色土：粘質でしまり弱い土質。②暗茶褐色土：灰褐色土の小ブロックを若干含む。③暗灰茶褐色土：灰褐色土の小ブロックを多く含む。④灰褐色土：暗灰褐色土の小ブロックを若干含む。遺物は覆土から剥片が出でている。

14号土坑（第20図）

中央区に位置し、平面は梢円形を呈する。長軸1.0m、短軸0.53m、確認面からの深さは7cmを測る。平坦な底面を有し、長軸方向は北北東を指す。遺物は検出されず時期は不明。

15号土坑（第20図）

中央区に位置する。遺構の西半分は削平を受け平面形や大きさは不明である。確認面からの深さは7cmを測り、平坦な底面を有する。

16号土坑（第20図、図版11）

中央区に位置し、平面は不整円形を呈する。東西軸0.7m、南北軸0.67m、確認面からの深さは31cmを測る。底面はすり鉢状を呈し、長軸方向は東西を指す。遺物は検出されず時期は不明。

17号土坑（第20図）

中央区に位置する。遺構の東半分は削平を受け平面形や大きさは不明である。確認面からの深さは21cmを測り、底面はほぼ平坦面を有する。遺物は検出されず時期は不明。覆土は①暗褐色土：灰褐色土を霜降状に含む。

18号土坑（第21図）

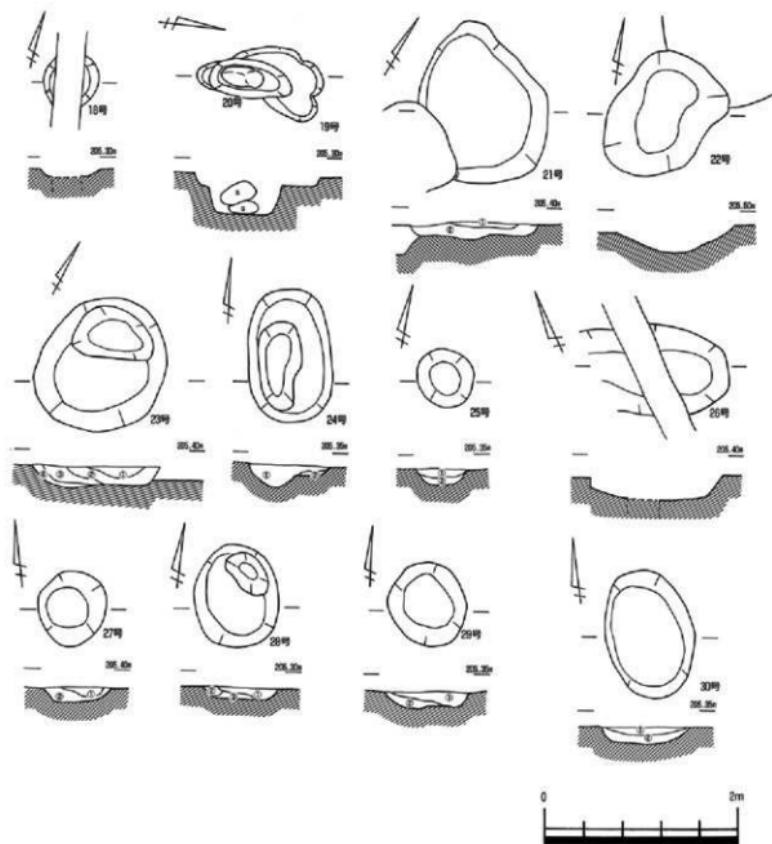
中央区に位置し、遺構中央部が水道管理設で擾乱を受けているが遺構の形状は直径55~60cmの円形を呈するものと推測される。確認面からの深さは現存値で7cmを測る。

19号土坑（第21図）

中央区に位置し、20号土坑と重複し本土坑が古い。平面の形状から複数の遺構が重複した形態とも受け取れるが、ここでは1基の土坑とする。南北軸1.3m、東西軸0.65m、確認面からの深さ10~15cmを測り、底面は平坦面を呈する。

20号土坑（第21図、図版11）

中央区に位置し、19号土坑と重複し本土坑が新しい。平面形は長楕円形を呈し南北軸0.83m、東西軸0.39m、確認面からの深さは80cmを測る。覆土中より2個の円環が重なった状態で検出された。



第21図 18~30号土坑

21号土坑（第21図）

中央区に位置し、22号土坑と重複し本土坑が新しい。平面形は不整楕円形を呈し長軸1.66m、短軸1.4m、確認面からの深さは38cmを測り、底面は緩い起伏を有する。覆土は①暗茶褐色土：しまりあり硬い土質。②灰茶褐色土：灰褐色土をブロック状に含む。遺物は検出されず時期は不明。

22号土坑（第21図）

中央区に位置し、21号土坑と重複し本土坑が古い。平面形は不整楕円形を呈し長軸1.35m、短軸0.98m、確認面からの深さは25cmを測り、底面はすり鉢状を呈する。

23号土坑（第21図）

中央区に位置し、7号竪穴と重複し本土坑が新しい。平面形は不整円形を呈し長軸1.38m、短軸1.25m、確認面からの深さは24cmを測り、底面は緩い起伏を有する。覆土は①暗茶褐色土：粘質でしまりある土質。②暗灰茶褐色土：暗茶褐色土を多く含む。③暗茶褐色土、④暗灰褐色土。遺物は検出されず時期は不明。

24号土坑（第21図）

中央区に位置し、平面は楕円形を呈する。長軸1.35m、短軸0.85m、確認面からの深さは24cmを測る。底面は段を有し長軸方向は北を指す。覆土は①灰茶褐色土②暗灰茶褐色土。遺物は検出されず時期は不明。

25号土坑（第21図、図版11）

中央区に位置し、平面は円形を呈する。長軸0.6m、短軸0.56m、確認面からの深さは18cmを測る。底面は平坦で長軸方向はほぼ北を指す。覆土は①暗灰茶褐色土②灰茶褐色土。遺物は検出されず時期は不明。

26号土坑（第21図、図版11）

中央区に位置し、遺構中央部と西側が搅乱を受けている。平面形は楕円形を呈すると推測され長軸1.4m、短軸0.83m（現存値）、確認面からの深さは現存値で25cmを測る。遺物は検出されず時期は不明。

27号土坑（第21図）

中央区に位置し、平面は不整円形を呈する。長軸0.76m、短軸0.7m、確認面からの深さは16cmを測る。底面は平坦で長軸方向はほぼ北を指す。覆土は①灰茶褐色土②暗灰茶褐色土。遺物は検出されず時期は不明。

28号土坑（第21図）

中央区に位置し、平面は不整円形を呈する。長軸1.05m、短軸0.85m、確認面からの深さは12cmを測る。底面は平坦で長軸方向はほぼ北を指す。覆土は①暗茶褐色土：褐色土をブロック状に含む、②暗褐色土、③灰茶褐色土を含む。遺物は検出されず時期は不明。

29号土坑（第21図、図版11）

中央区に位置し、平面は不整円形を呈する。長軸0.87m、短軸0.76m、確認面からの深さは17cmを測る。底面は緩い起伏を有し長軸方向は北西を指す。覆土は①暗灰茶褐色土：褐色土をブロック状に含む。②灰茶褐色土①をブロック状に含む。遺物は検出されず時期は不明。

30号土坑（第21図、図版12）

中央区に位置し、平面は楕円形を呈する。長軸1.32m、短軸0.89m、確認面からの深さは17cmを測る。底面は平坦で長軸方向はほぼ北を指す。覆土は①暗灰茶褐色粘質土、②灰茶褐色土。遺物は検出されず時期は不明。

(iv) 溝跡（第22図）

溝跡は北区と中央区で検出されたが、擾乱を受けたためか覆土の堆積が浅い。幅の狭い溝跡は弧状を呈するものがあり住居跡の周溝の可能性もある。

1号溝跡（第22図）

北区に位置し、東西方向から南に向けて緩やかな弧状を呈する。溝幅は30cm～50cmで深さは確認面から6cmを測る。削平を受けているが調査区外の南西方向に伸びている。

2号溝跡（第22図）

北区に位置し、溝幅は22cm～60cmで深さは確認面から5cmを測る。削平を受けているが南西方向に屈曲し3号溝跡と並走する位置関係にあり、住居跡の周溝の可能性もある。

3号溝跡（第22図）

北区に位置し、溝幅は35cm～50cmで深さは確認面から3cmを測る。削平を受け端部をピットと重複し南西方向に屈曲し2号溝跡と並走する位置関係にある。2号溝跡と同様に住居跡の周溝の可能性もある。

4号溝跡（第22図）

北区に位置し、溝幅は48cm～70cmで深さは確認面から10～12cmを測る。「く」字状に屈曲し、遺構面には5基のピットが検出された。

5号溝跡（第22図）

北区に位置し、擾乱を受けているが平面形は逆「く」字状を呈すると推測される。溝幅は70cmで深さは確認面から10cmを測る。

6号溝跡（第22図）

北区に位置し、溝幅は36cm～42cmで深さは確認面から10～12cmを測る。4～6号溝跡を線で結ぶと「コ」字状を呈する。住居跡の周溝の可能性もある。

7号溝跡（第22図）

北区に位置し、溝幅は最大で28cmで深さは確認面から15cmを測る。

8号溝跡（第22図）

北区に位置し、溝幅は最大で25cmで深さは確認面から10cmを測り、東側を欠損する。

9号溝跡（第22図、図版10）

北区に位置し、11号土坑と重複し本遺構が新しい。平面と断面から複数の溝跡の集まりと推測される。覆土から多くの礫が検出され、8基のピットも確認された。覆土は①暗灰茶褐色土、②黒褐色土、③灰褐色砂質土。本遺構の南西部で砥石が出土した。

10号溝跡（第22図）

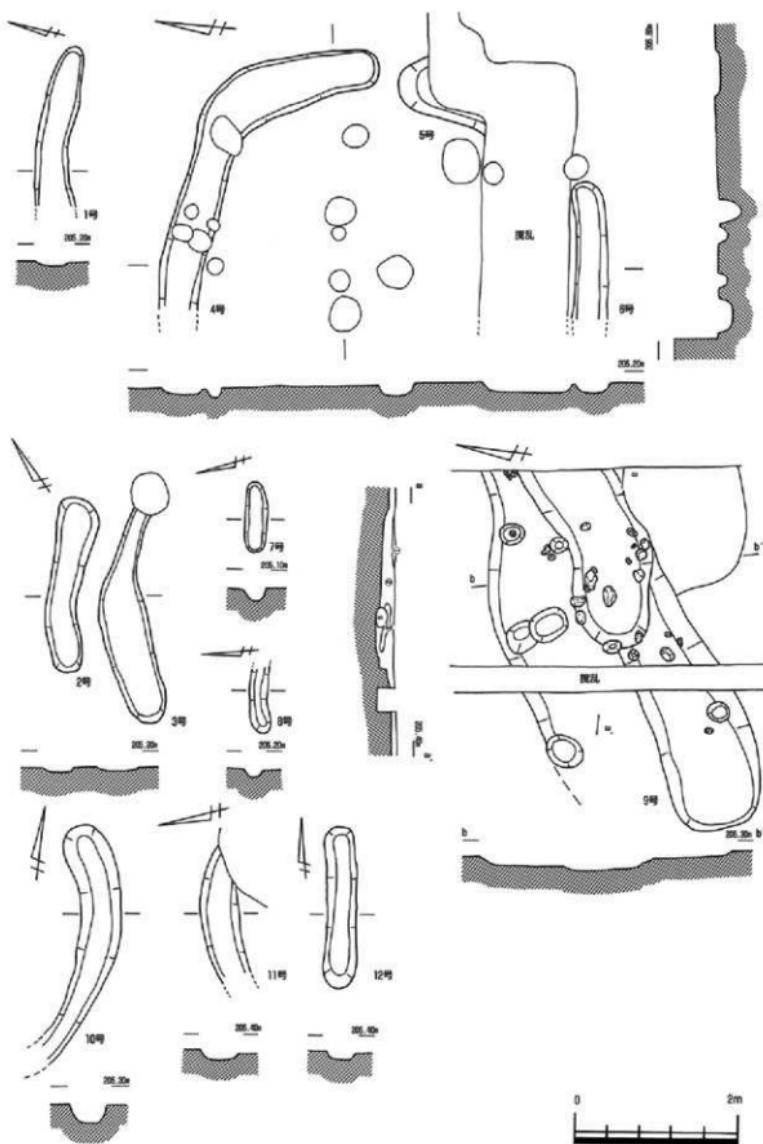
中央区に位置し、平面形は弧状を呈する。溝幅は28cm～55cmで深さは確認面から22cmを測る。

11号溝跡（第22図）

中央区に位置し、12号土坑と重複する。溝幅は最大で48cm、深さは確認面から10cmを測る。

12号溝跡（第22図）

中央区に位置し、溝幅は33cm～40cmで深さは確認面から22cmを測る。



第22図 滅跡

(v) 堀跡（第14図・23、図版12）

堀跡は調査区中央部と南側で検出された。当該区域は古くから遠藤屋敷とよばれ、遺跡台帳にも登録された館跡である。調査区では幅3～5mの堀跡が併走する状態で二重に検出された。

1号堀跡（第14図・23、図版12）

方形館の北東部から東辺にあたる箇所で検出された。水道管理設で一部搅乱を受けているが幅3～4m、確認面からの深さは約50cmを測る。覆土は次のとおりである。①黒褐色土：粘質でしまりあり。②黒褐色土：暗青灰色の砂を線状に含む。③黒褐色土：粘質でしまりあり、サビ状の褐色土若干含む。④暗青灰褐色土：粘質で粒子の細かい土質。⑤a 暗褐色土：粘質でしまりあり。⑤b 暗褐色土：径5～10cmの褐色土の小ブロックを直状に含む（堀の底面）。

2号堀跡（第14図・23、図版12）

1号同様、方形館の北東部から東辺にあたる箇所で検出された。幅4～5m、確認面からの深さは約1mに達し、堀底は平坦で青灰色土まで掘り込まれ壁は約45度の角度で立ち上がりをみせる。覆土の堆積は次のとおりである。①暗褐色土：粘質土でしまりある。②暗褐色土：青灰色の小ブロックと小礫を若干含む。③暗青灰色土：白色粒子を多く含み砂混じりの粘質性。④灰褐色土：地山の土質をブロック状に含む。⑤暗灰褐色土：粘性が強く橙色のセンイ質を多く含む。⑥暗青灰色土：砂を含む粘質土。⑦暗灰褐色土：黒褐色土青灰色土の小ブロックを若干含む。⑧黒褐色土：粘質でしまりあり。⑨暗灰茶褐色土：黒褐色土 青灰色土が混在した粘質土。

(vi) 性格不明遺構（第23図）

1号遺構性格不明遺構

北区に位置し、遺構は西側の調査区外に広がるものと推測される。平面の形状は不明であるが壁は垂直並みに立ち上がる。遺物の出土はなく時期は不明。覆土は①黒褐色土：褐色土の中1～3cm礫をブロック状に含む。②灰褐色土：黒褐色土を霜降状に含む。

2号遺構性格不明遺構

北区に位置し、3号住居跡と重複し本遺構が新しい。南北に伸びる遺構は北西方向に屈曲し調査区外に広がる。遺物の出土はなく時期は不明。覆土は①暗茶褐色土：粘質で小礫を多く含みしまりあり。②暗茶褐色土：粘性を帯び小礫を若干含む。③暗灰褐色土：黒褐色土をブロック状に含む砂質土。

3号遺構性格不明遺構

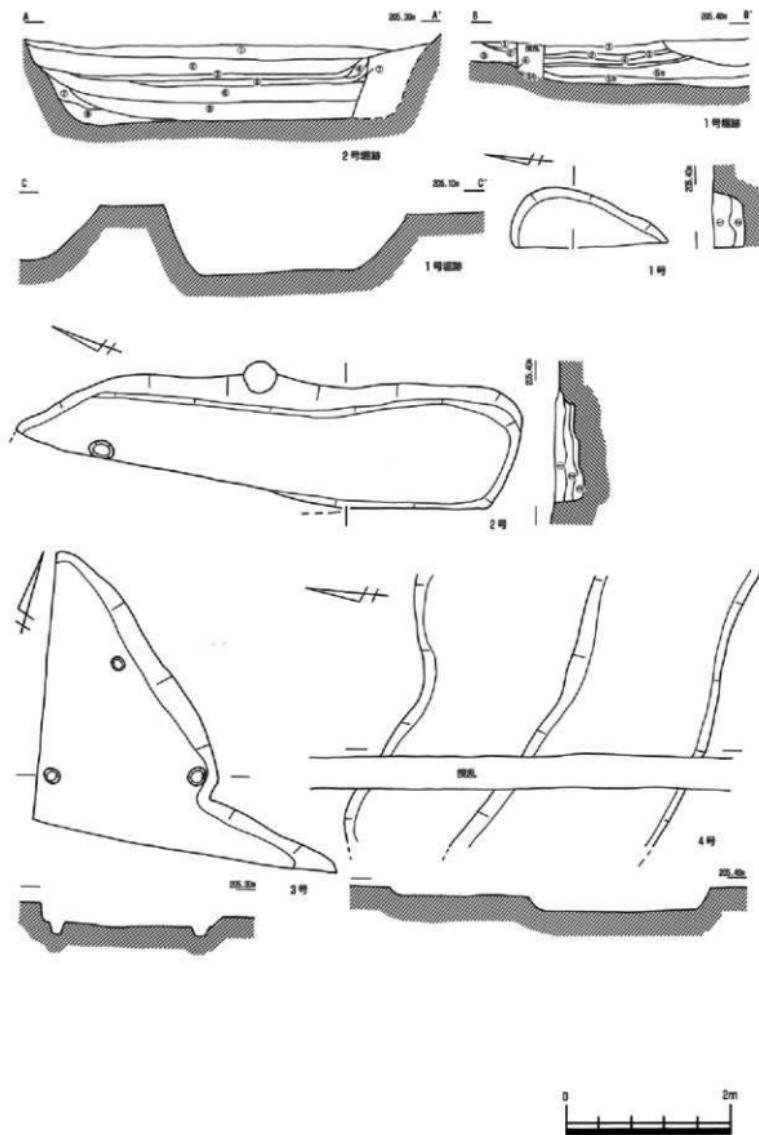
北区の南西隅に位置する。平面形は整っていないが3基のピットが検出され、壁は緩やかに立ち上がり底面は起伏がある。遺物の出土はなく時期は不明。

4号遺構性格不明遺構

中央区で検出され、底面は平坦面で段を有し北側が浅く南側がやや深い。遺物の出土はなく時期は不明。

(vii) ピット（第14図）

ピットは北区・中央区から93基検出され、底面に礫が検出された例もある。詳細は表3を参照されたい。



第23図 痕跡、性格不明遺構

表3 ピット計測表

() は現存値

ピット No	区名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	備考	ピット No	区名	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	北区	40.9	40.5	12.4		51	中央区	30.5	30.2	46.0	
2	北区	50.2	40.7	10.1		52	中央区	20.7	20.7	20.5	
3	北区	30.3	20.9	20.2		53	中央区	30.1	20.5	8.8	
4	北区	20.5	20.3	14.1		54	中央区	30.5	20.7	21.5	
5	北区	30.8	20.8	21.6		55	中央区	20.4	20.0	17.6	
6	北区	60.4	30.3	54.3		56	中央区	30.9	30.0	24.1	
7	北区	20.5	20.2	5.8		57	中央区	20.4	20.4	26.6	
8	北区	30.3	20.7	7.2		58	中央区	20.1	20.0	29.4	
9	北区	30.8	30.0	31.8		59	中央区	10.7	10.7	15.7	
10	北区	30.8	20.5	17.0		60	中央区	20.5	20.3	25.6	
11	北区	20.6	20.5	15.9		61	中央区	30.5	30.0	14.1	
12	北区	10.5	9.0	15.2		62	中央区	60.1	30.5	27.0	
13	北区	60.8	40.8	49.2	剥片出土	63	中央区	10.6	10.5	5.1	
14	北区	30.1	20.9	10.0		64	中央区	30.0	20.0	15.3	
15	北区	30.2	30.0	7.0		65	中央区	20.4	20.4	32.7	
16	北区	30.9	20.5	3.7		66	中央区	30.3	20.4	5.1	
17	北区	10.7	10.5	2.1		67	中央区	20.1	10.9	7.6	
18	北区	50.2	40.5	14.3		68	中央区	40.6	30.0	10.0	
19	北区	20.6	20.4	7.8		69	中央区	20.8	20.5	21.8	
20	北区	30.0	20.9	7.8		70	中央区	60.5	40.0	19.6	
21	北区	20.5	20.5	7.0		71	中央区	50.3	40.8	27.1	
22	北区	20.2	20.0	10.3		72	中央区	50.2	30.2	20.0	
23	北区	20.4	20.2	10.8		73	中央区	30.1	30.0	12.5	
24	北区	20.5	10.6	4.7		74	中央区	30.2	20.7	12.4	
25	北区	30.1	10.6	5.7		75	中央区	70.0	50.7	14.3	
26	北区	30.5	20.6	33.3		76	中央区	40.5	30.3	17.9	
27	北区	10.6	10.2	12.6		77	中央区	40.7	40.7	19.8	
28	北区	30.2	30.0	20.7		78	中央区	50.1	40.3	14.1	
29	北区	50.3	30.1	13.8		79	中央区	40.5	20.0	14.8	
30	北区	10.9	10.7	14.3		80	中央区	30.5	20.3	22.7	
31	北区	20.5	10.9	15.5		81	中央区	20.5	20.4	21.0	
32	北区	30.0	20.6	28.3		82	中央区	20.0	20.0	22.3	
33	北区	10.8	10.6	19.8		83	中央区	30.2	20.6	35.2	
34	北区	20.1	20.1	10.1		84	中央区	40.0	20.2	6.0	
35	北区	30.9	20.4	19.4		85	中央区	40.0	20.2	24.4	
36	北区	20.9	20.7	19.8		86	中央区	30.0	20.7	39.4	
37	北区	40.6	40.0	16.9		87	中央区	30.5	30.2	5.0	
38	北区	10.9	10.8	11.9		88	中央区	30.0	20.6	23.5	
39	北区	30.8	30.6	38.7		89	中央区	40.0	20.8	4.8	
40	中央区	50.7	40.8	40.5		90	中央区	40.0	20.6	20.0	
41	中央区	50.6	40.5	38.3		91	中央区	20.5	20.4	17.5	
42	中央区	60.1	10.7	18.9		92	中央区	30.0	20.2	17.9	
43	中央区	20.8	20.8	34.6		93	中央区	38.0	25.5	12.0	
44	中央区	110.0	30.4	49.7	底面に摩耗出						
45	中央区	30.8	10.4	20.0							
46	中央区	20.9	20.7	16.4							
47	中央区	70.5	30.5	12.8							
48	中央区	20.0	10.8	9.0							
49	中央区	20.7	10.6	10.2							
50	中央区	40.0	20.7	17.6							

5. 出土遺物

このたびの調査で出土した遺物は整理箱にすると1箱と少なくなく、種類は縄文土器、陶器、磁器、剝片、砥石である。いずれも小破片であるが縄文土器や剝片は調査区中央部北端から北側にかけて、陶磁器類は調査区中央部南半から南側にかけて出土し、遺構の分布状況に相応した出土とみることができる。

(i) 縄文土器 (第24図1～5、図版13)

いずれも比較的厚手の土器で縄文施文部を、沈線を用いて曲線文を描いたもので縄文時代中期後葉の土器と考えられる。1は口縁部、3は底部、他は胴部破片である。1～3は1号住居跡から出土したもの。

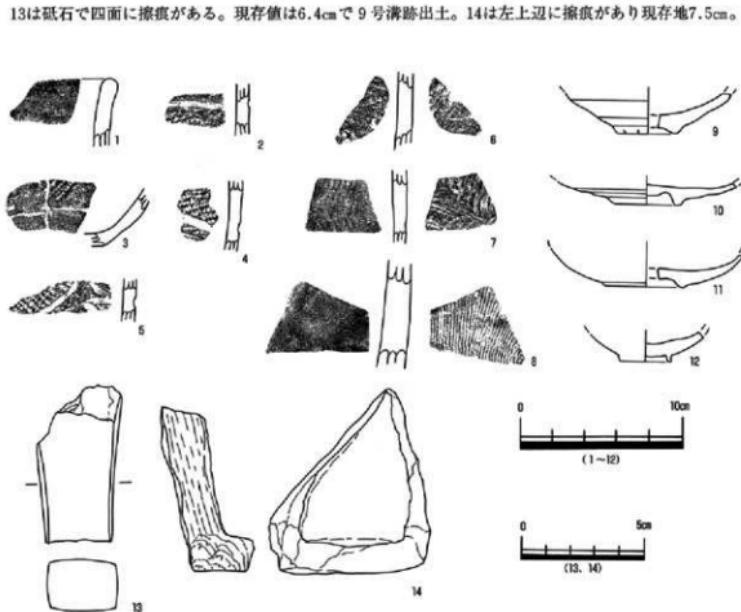
(ii) 須恵器 (第24図6・7、図版13)

堀跡から2点出土している。器壁の厚さや湾曲具合から壺など大型土器の破片と考えられる。両者とも器面の表裏に叩き痕をもつ。須恵器の使用年代から奈良・平安時代の所産である。

(iii) 陶磁器 (第24図9～12、図版13)

8は擂鉢で産地は会津本郷。時期は18世紀以降。9は陶器の底部で器種は碗。外面下位と底部は無釉で内面底部に胎土目痕が認められる。2号堀跡から出土し、産地は唐津で時期は16～17世紀。10は磁器の皿、11は磁器の碗で器全体に釉が施される。両者とも南区の堀跡から出土し、産地は伊万里で時期は17世紀前半。12は磁器の碗で産地は肥前で、南区の堀跡から出土し、時期は18世紀以降。

(iv) 石製品 (第24図13・14、図版13)



第24図 南台遺跡出土遺物

6.まとめ

このたびの調査区域は南台遺跡のなかで西端部にあたる区域と想定し調査を行ってきたが、住居跡をはじめさまざまな遺構が検出され、集落はさらに西に広がるものと考えられる。ただ、これまで実施した調査結果をみると遺跡北東部において近世と奈良・平安時代の集落跡が、南東部では古墳時代の集落跡がそれぞれ検出され、加えて重ね焼き状態の須恵器から窯跡の存在も想定される。広範囲におよぶ南台遺跡も時代によって多様な生活の場を提供してきた地域といえる。

高台に営まれた南台遺跡は西から東に流れる小河川の発達が著しく、当該調査区においても3条の小川が流れ水の豊かな地域でもある。また、開発区域北側で道路工事に付随する水道管埋設工事の深掘りにおいて幅約25mの旧河川跡が東西方向に確認され、南台遺跡の北辺も浮き彫りにすることができた。このことを当該調査区に投影すると、本調査で検出された遺構は旧河川の右岸域（南側）に営まれた集落の一部で、集落全体は東西方向に広がるものと推定される。

南北に伸びる調査区も遺構の種類によっていくつかのまとまりとして捉えることができる。ひとつは北側区域で住居跡や竪穴、溝跡や柱穴が密集して検出され、遺構の種類から居住域と考えられる。さらに遺構の重複関係をみると方形の竪穴は楕円形の竪穴住居を壊して構築されており、方形の竪穴が新しく楕円形の竪穴住居跡が古いという新旧関係が想定される。1号住居跡の周溝と床面から縄文土器が出土しており当該住居跡は縄文時代の可能性がある。

ふたつめは中央区南半から南側区にかけて堀跡が検出され、中世城館の領域と考えられる。当該区域は古くから遠藤屋敷とよばれ堀跡や土塁の存在が伝えられている。調査区西側約70mの地点には土手状の高まりと溝状の水路が並走し、土塁と堀跡の痕跡をとどめている。また、堀跡のトレーンチから陶磁器や須恵器の出土があった。陶磁器は中世末から近世初めの年代がえられ、産地は唐津や伊万里と特定された。古い時代から交易によってさまざまなものが流通していたと推定される。須恵器の出土も重要な意味をもつ。堀が埋まる段階で埋没したものであり、周囲に奈良・平安時代の集落の存在が予想される。

最後は中央区北半区域で土坑や溝跡、竪穴が検出され、前二者の中間に位置し出土遺物も縄文時代の土器や石器と陶磁器が出土している。縄文時代遺跡の南端であり城館の北側にあたり、遺物・遺構も新旧が混在している区域である。

以上、南台遺跡調査のまとめとしたが、多くの課題も残った。検出された遺構に比べると遺物の出土量が極端に少なく、住居跡や土坑の年代を特定することが困難であった。遺物が少ない遺跡なのか、後世の開発等で遺物がなくなってしまったのかなど様々な要因があげられるが、周辺地域の今後の調査に委ねることとしたい。

最後になりましたが、発掘調査にご理解とご協力をいただきました地元のみなさま、工事に関係された機関のみなさま、それに厳しい天候のなかで発掘調査に従事いただきましたみなさまに心からお礼を申し上げます。



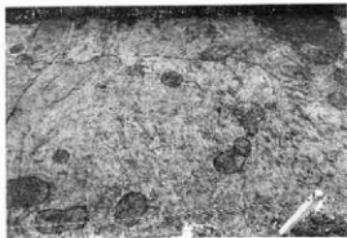
調査前風景（南から）



遺跡近景（東から）



遺構検出状況（北区西半）



1号住居跡検出状況

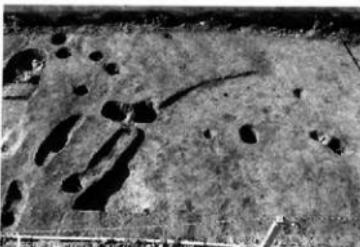


1号住居跡完掘状況

図版8 南台遺跡（1）



2号住居跡検出状況



同 完掘状況



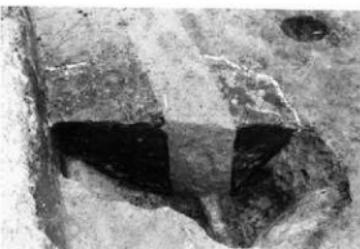
3号住居跡完掘状況



1・2号堅穴完掘状況



1号土坑半截



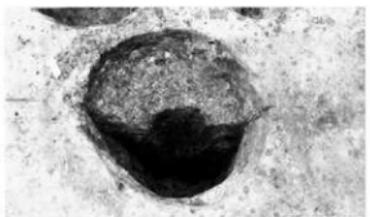
7号土坑半截



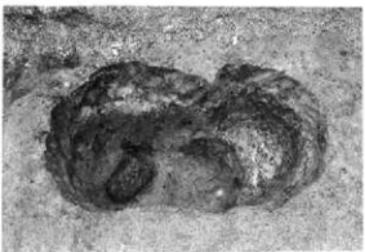
3号土坑



7号土坑完掘



ピット半截状況



ピット検出状況



ピット半截状況



9号溝跡検出状況



ピット半截状況



北区完掘状況（西半）



北区完掘状況（東半）

図版10 南台遺跡（3）



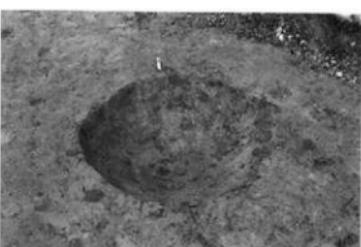
中央区遺構検出状況（西半）



3号竪穴検出状況



13号土坑



16号土坑



20号土坑



25号土坑



26号土坑



29号土坑

図版11 南台遺跡（4）



30号土坑



1号堀跡土層断面



中央区遺構検出状況（西半）



2号堀跡土層断面

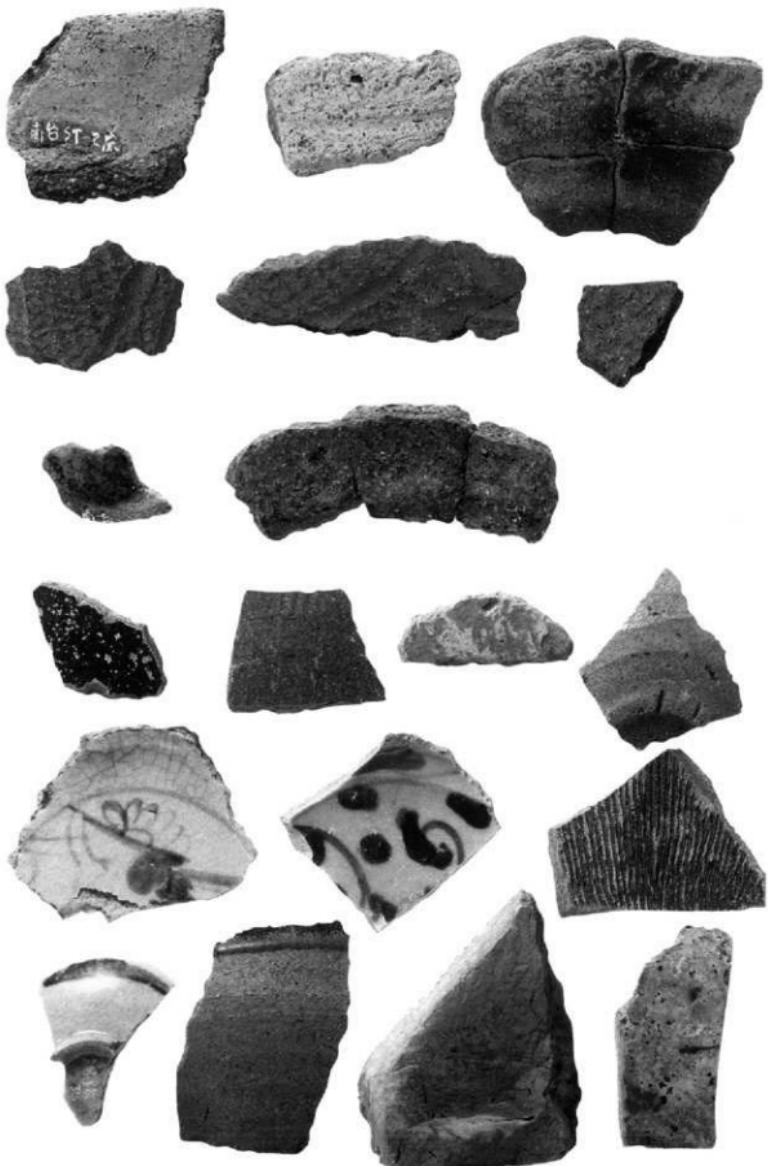


中央区遺構検出状況（東半）



堀跡検出状況（南区）

図版12 南台遺跡（5）



圖版13 南台遺跡 (6)

報告書抄録

ふりがな	しないいせきはくつちょうしほうこくしょ							
書名	市内遺跡発掘調査報告書							
副書名	宮遺跡の調査、小桜館の調査、南台遺跡の調査							
巻次	16							
シリーズ名	山形県長井市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	28集							
編著者	岩崎義信							
編集機関	長井市教育委員会							
所在地	山形県長井市清水町一丁目25番1号 TEL 0238-84-7677							
発行年月日	2008年3月31日							
所取遺跡名	所在地		コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査要因
宮	山形県長井市 十日町		6209	1 38度 06分 35秒	140度 02分 21秒	2007.07.19 ～ 2007.08.03	200m ²	個人宅地 造成
小桜館	山形県長井市 大町		6209	10 38度 06分 26秒	140度 02分 16秒	2007.04.19 ～ 2007.04.23	140m ²	公園造成
南台	山形県長井市 九野本字長野		6209	11 38度 05分 27秒	140度 02分 04秒	2007.10.29 ～ 2007.12.17	642m ²	市道改良 工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
宮	集落跡	縄文時代中期	ピット、掘跡		縄文土器			
小桜館	城館址 集落	中世 近世	石壙				明治期の旧郡役所の石壙が検出された。	
南台	集落跡	縄文時代 奈良・平安時代 中世	住居跡、土坑、溝跡、 ピット、掘跡		縄文土器、須恵器、 陶器			

長井市埋蔵文化財調査報告書 第28集
市内遺跡発掘調査報告書(16)

平成20年 3月31日発行

発行 長井市教育委員会
山形県長井市清水町1-25-1
TEL (0238) 84-7677
印刷 ダイヤ印刷所
